



東京大學

東洋文化研究所

要覽 1994年度

東京大学東洋文化研究所



6413042794

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE
UNIVERSITY OF TOKYO

C3

45

1994



東洋文化研究所要覧

目 次

I	沿 革	1
II	組 織	5
III	職 員	7
IV	財 政	12
V	施 設	13
VI	図書・資料	15
VII	電算化の進展状況	21
VIII	研究活動	22
	A 部門研究	22
	B 長期国際共同研究	36
	C 班研究	37
	D 定例研究会	65
	E 内外学術研究・調査	74
	F 国際学術交流	84
	G 学内関連部局との協力体制	96
	H 国内研究機関との協力活動	97
	I 学内教育参加	101
	J 刊行物一覧	107
	K 執筆著書・論文等総数 受賞	115
IX	所員の活動	116
X	附属東洋学文献センター	198

I 沿革

(1) 設立目的

本研究所は1941年11月26日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に設置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で，附属図書館内に研究室，書庫，事務室を置いて発足した。1949年，新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し，これまでの附属図書館内研究室を分室とし，研究の発展をはかった。

ついで1951年，人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが，アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するにともない，地域区分を軸とした将来計画のもとで，従来の諸科学の専門体系による部門構成を，汎アジア経済部門，汎アジア人文地理学部門，汎アジア文化人類学部門，東アジア政治・法律部門，東アジア歴史部門，東アジア美術史・考古学部門，東アジア哲学・宗教部門，東アジア文学部門の8部門に再編成し，さらに地域部門の増設計画を立てた。そして1960年には南アジア政治・経済部門，1964年には東北アジア部門，1968年には西アジア歴史・文化部門，1973年には東南アジア経済・社会部門，1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて，ようやく13部門を擁するにいたった。

なお1966年には，東洋学に対する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として，附属東洋学文献センターが附属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら，しかし各専門分野の孤立を避け，アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために，合同の研究会，各種研究班によって学

I 沿 革

際的研究を育て、また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門分野の研究者に研究を委嘱し、協力を求める方針をとってきた。

しかしながら、アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日、本研究所が、わが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果たすために、研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで、1981年より新しい構想に基づきいわゆる大部門制を採用し、これまでの13部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の4部門に統合し再出発することになった。

創立以来23年にわたって、本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが、1964年に、本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。1964年から1967年にかけて工事が行われて総合研究資料館との合同庁舎が完成し、5階以上を本研究所が使用することになった。

しかし、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などにとともに、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急設備等の強い要望があり、1977年から施設設備の拡充の必要性を強調してきた。1982年に至ってこれが認められ、総合研究資料館との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これにともなって全面的に改修工事を行い、1984年3月に工事が完成し、本研究所の建物総面積は6,577平方メートルで、地下1階より地上8階までとなった。3階までを所長室、事務室、図書室、附属東洋学文献センター、会議室等とし、3階の一部と4階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。

(2) 将来計画

東京大学が組織の面で大きく変わろうとしている現在、本研究所も、研究課題の設定や研究組織の面で大きな転換を必要としている。本学の文学部、教養学部、その他の部局でのアジア研究と比較した際の本研究所の研究の特色を述べるならば、それは古典研究と現代研究との統合、と表現できよう。そして、多

様なアジアの諸地域を比較する視点をつねに保ってきたこともまた特色の一つである。研究所の各教官はそのような特色をもつ多彩なテーマで個別研究をおこない、また、共同研究を主催してきた。そして研究所の何人かの教官が協力し、他部局・他大学の研究者の協力も得て、各種の海外学術研究を積極的に組織してきた。このような研究の膨大な蓄積の結果、本研究所は世界的に高い評価を得るにいたっている。今後も、時間軸・空間軸での広がりと比較を十分に意識したうえでの特定のテーマの研究は、個別の教官、あるいは複数の教官の共同作業によって、着実になされるに違いない。またそれを支えるための研究所の体制は維持され、一層の発展が計られなければならない。

アジアの時間的・空間的広がり、世界の半ばを超す。その膨大なアジアを研究するためには多彩な研究プロジェクトが必要なのであるが、同時に、研究所がまとまりのある一つの研究機関であるために、まとまりのある研究プロジェクトも必要である。本研究所は、1988年度から3か年計画でなされた文部省の科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」の実施に際して、教官の半ばが参加してその研究計画実施の中心機関として機能した実績をもつ。その経験を受けて本研究は、10年計画の、研究所をあげて取り組む二つの研究プロジェクトを設定し、1993年度からその準備作業に入った。その一つは、「激動するイスラム圏の政治・社会構造の変容過程の研究」で、もう一つは、「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」である。

今日、確かにアジアは激動の中にある。その焦点の一つはイスラム圏であり、もう一つは中国である。むろん、南アジアも東南アジアも、そして中央アジアも東北アジアも、激動のさなかにある。それをもイスラムと中国という二つの切り口から分析してみようとするのが二つの研究計画である。研究は、本研究所が事務局の役割を引き受け、本学の他部局や他大学・研究所等の研究者、そして海外、なかんずくアジア諸国の研究者の協力を得ておこなわれよう。

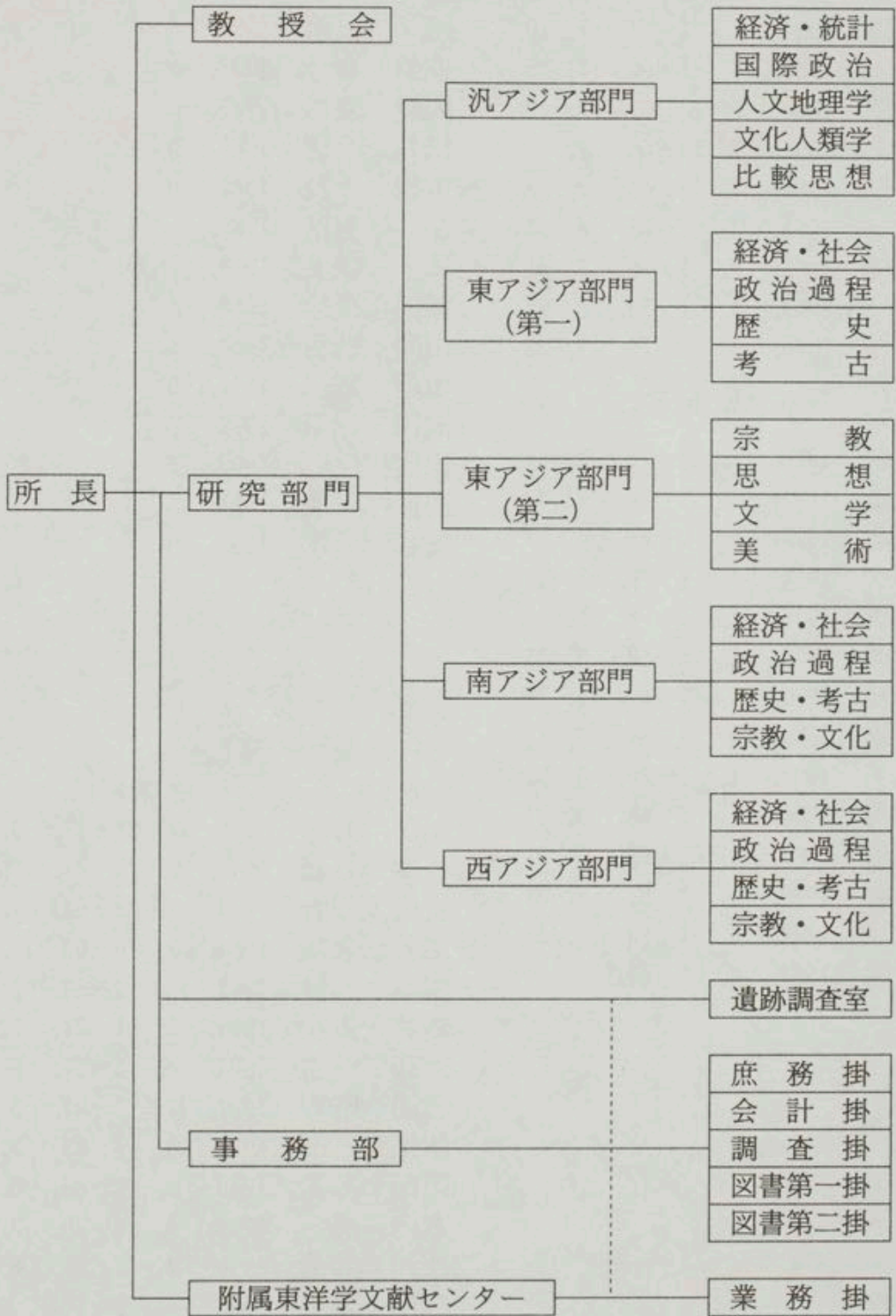
このような長期にわたる大規模な研究のためには恒常的な予算措置が必要であるが、研究所が実施してきた特別事業を大幅に改定して、必要な予算を確保することを概算要求している。予算が必要なことと同時に、人が重要である。

I 沿 革

アジア諸国の研究者を招聘して研究計画の実施にあたってもらうとともに、研究のネットワークを広げるために、外国人客員部門の新設を求めている。また、このような研究計画を実り豊かなものにするためには、現地定着型の研究を組織することが必要であるが、そのためには本研究所の海外研究基地を作ることが構想している。その有力な候補地の一つが、中国への返還が予定されている香港である。返還にともなうさまざまな変化が、香港内部だけでなく、全世界的規模で生じるものと予想される。その変化を現場から学問的に押さえることは本研究所にふさわしい任務であり、また世界から期待されている任務である。返還の時期が迫っている今日、香港での研究基地の設置のために研究所は全力を傾けている。またもう一つの有力な候補地としてアンマンを考えている。

大学附置の研究所が大学院教育にどうかかわっていくかは、これから全学的に議論されなければならない大きな問題である。若手研究者の育成をアジア研究の重要な一環として位置付けてきた本研究所は、アジア地域の比較論・関係論を中心とする新たな大学院研究科ないしは専攻の設置を構想してきた。大学全体での議論の過程で、この構想を実現すべく努力をつづけていきたい。

II 組 織



II 組 織

歴代所長

氏名	在職期間
桑田 芳蔵	1941. 11. 26-43. 3. 31
宇野 圓空	1943. 4. 1-46. 10. 5
戸田 貞三	1946. 10. 6-47. 9. 30
辻 直四郎	1947. 10. 1-54. 3. 31
仁井田 陸	1954. 4. 1-58. 7. 10
飯塚 浩二	1958. 7. 11-60. 7. 9
結城 令聞	1960. 7. 10-62. 7. 9
江上 波夫	1962. 7. 10-64. 7. 9
飯塚 浩二	1964. 7. 10-65. 2. 28
小口 偉一	1965. 3. 1-66. 3. 31
川野 重任	1966. 4. 1-68. 3. 31
小口 偉一	1968. 4. 1-70. 3. 31
泉 靖一	1970. 4. 1-70. 11. 15
川野 重任 (事務取扱)	1970. 11. 16-70. 12. 17
鈴木 敬	1970. 12. 18-72. 3. 31
荒 松雄	1972. 4. 1-73. 3. 31
窪 徳忠	1973. 4. 1-74. 3. 31
佐伯 有一	1974. 4. 1-76. 3. 31
大野 盛雄	1976. 4. 1-78. 3. 31
深井 晋司	1978. 4. 1-80. 3. 31
中根 千枝	1980. 4. 1-82. 3. 31
大野 盛雄	1982. 4. 1-84. 3. 31
尾上 兼英	1984. 4. 1-86. 3. 31
山崎 利男	1986. 4. 1-88. 3. 31
斯波 義信	1988. 4. 1-90. 3. 31
池田 温	1990. 4. 1-92. 3. 31
松谷 敏雄	1992. 4. 1-94. 3. 31
後藤 明	1994. 4. 1-現在

名誉教授

氏名	称号授与
江上 波夫	1967. 5
川野 重任	1972. 5
窪 徳忠	1974. 5
鈴木 敬	1981. 5
荒 松雄	1982. 5
佐伯 有一	1983. 5
大野 盛雄	1985. 5
松井 透	1987. 5
中根 千枝	1987. 5
関 寛治	1987. 5
尾上 兼英	1988. 5
鎌田 茂雄	1988. 5
山崎 利男	1990. 5
板垣 雄三	1991. 5
池田 温	1992. 5
山田 三郎	1992. 5
田仲 一成	1993. 5
友杉 孝	1993. 5

歴代事務長

氏名	在職期間
山高 力三	1941. 11. 27-42. 9. 30
根本 喜蔵	1942. 10. 1-44. 7. 9
長内太郎吉	1944. 7. 10-54. 7. 15
工藤松之助	1954. 7. 16-63. 10. 31
宮本 健	1963. 11. 1-69. 2. 28
新井 康次	1969. 3. 1-74. 3. 31
斎藤 益	1974. 4. 1-77. 6. 30
三浦 皓守	1977. 7. 1-81. 3. 31
伊東秀三郎	1981. 4. 1-83. 3. 31
岡部 藤男	1983. 4. 1-86. 3. 31
木内 義一	1986. 4. 1-90. 3. 31
江澤 兵治	1990. 4. 1-92. 6. 1
石川 純男	1992. 6. 1-現在

III 職 員

所 長 後 藤 明

汎アジア部門

原 洋之介	教 授	(707室)	小 川 裕 充	教 授	(510室)
猪 口 孝	教 授	(702室)	林 秀 薇	助 手	(513室)
田 中 明 彦	助 教 授	(610室)	笠 井 直 美	助 手	(708室)
松 井 健	助 教 授	(703室)			
末 成 道 男	教 授	(711室)			
関 本 照 夫	教 授	(712室)			
岡 本 サ エ(兼)	教 授	(607室)			

南アジア部門

加 納 啓 良	教 授	(608室)
柳 澤 悠	教 授	(603室)
上 村 勝 彦	教 授	(602室)
永ノ尾 信 悟	教 授	(611室)

東アジア部門 (第一)

濱 下 武 志	教 授	(411室)
宮 嶋 博 史	教 授	(410室)
川 村 康	助 手	(412室)
松 丸 道 雄	教 授	(407室)
平 勢 隆 郎	助 教 授	(408室)
黨 武 彦(兼)	助 手	(413室)
青 木 敦	助 手	(512室)

西アジア部門

鈴 木 董	教 授	(803室)
松 谷 敏 雄	教 授	(807室)
羽 田 正	助 教 授	(810室)
後 藤 明	教 授	(808室)
鎌 田 繁	助 教 授	(802室)
山 中 由 里 子	助 手	(813室)

東アジア部門 (第二)

蜂 屋 邦 夫	教 授	(502室)
丘 山 新	教 授	(508室)
丸 尾 常 喜	教 授	(503室)

遺跡調査室

技術専門職員 千代延 恵 正

III 職員

事務部

事務長 石川純男
総務主任 齊藤 齊
図書主任 酒入丈夫

図書第一掛

図書第一掛長(兼) 酒入丈夫
事務官 芳賀満子
事務官 長野 眞
事務官 新居 彌生

庶務掛

庶務掛長 堀内 勉
国際交流主任 結城剛吉
庶務主任 益子一郎
事務官 若林美由紀

図書第二掛

図書第二掛長 栗林久美子
事務官 笠井伊里
事務官 山口 淳

会計掛

会計掛長 高野 胖
経理主任 岡 徹
給与主任 原 常子
事務官 秋廣耕平

附属東洋学文献センター

センター長(併) 後藤 明
センター主任 岡本サエ
助手 黨 武彦

調査掛

調査掛主任 木村源蔵

業務掛

業務掛長 飯野洋一
事務官 畦浦美矢子
事務官 神田百合枝
事務官 渋谷義治

職員等数 (1994年4月1日現在)

教授 19名 助教授 5名 助手 6名
事務官 22名 技官 1名
(研究担当 46名 研究協力 164名)

定 員

年 度	教 授	助教授	講 師	助 手	教官計	事務官	合 計
1941	3	3		6	12	2	14
1948	6	6		9	21	18	39
1949	〃	〃	3	11	26	25	51
1951	8	8	〃	13	32	24	56
1955	〃	〃	〃	〃	〃	23	55
1956	〃	7	〃	〃	31	〃	54
1958	〃	〃	〃	〃	〃	24	55
1959	〃	8	2	〃	〃	〃	〃
1960	9	9	〃	11	〃	〃	〃
1961	〃	〃	〃	〃	〃	27	58
1962	〃	〃	〃	〃	〃	28	59
1964	10	10	〃	12	34	30	64
1966	〃	11	〃	13	36	31	67
1967	〃	〃	〃	14	37	32	69
1968	11	12	0	14	〃	33	70
1969	〃	〃		13	36	〃	69
1971	〃	〃		〃	〃	32	68
1973	13	13		10	〃	〃	〃
1974	〃	〃		〃	〃	31	67
1975	〃	〃		〃	〃	30	66
1978	14	14		〃	38	〃	68
1979	〃	〃		〃	〃	29	67
1981	22	15		2	39	28	〃
1983	〃	〃		〃	〃	27	66
1985	〃	〃		〃	〃	25	64
1987	〃	〃		〃	〃	24	63
1991	〃	〃		〃	〃	23	62
1993	〃	〃		〃	〃	22	61

以下現在にいたる。

III 職 員

所内委員会と委員数 (1994年4月現在)

委員会等名称	人数
将来計画委員会	9名
国際交流委員会	6名
図書委員会	10名
刊行委員会	7名
要覧ワーキンググループ	8名
研究連絡委員会	8名
建 物 委 員	4名
電算化問題検討委員	3名
文献センター専門委員会 (文献センター委員会)	9名
文献センター運営委員会	10名
防 災 委 員 会	10名

教職員の異動等 1992年6月～94年4月

(教官)

1992. 10. 1 平勢 隆郎 助教授(東アジア部門(第一))に転任
1992. 10. 1 黨 武彦 助手(附属東洋学文献センター)に採用
1992. 12. 16 助教授 宮嶌 博史 教授(東アジア部門(第一))に昇任
1992. 12. 16 助教授 小川 裕充 教授(東アジア部門(第二))に昇任
1993. 3. 31 教 授 友杉 孝 停年退職(汎アジア部門)
1993. 3. 31 助 手 福嶋 真人 退職
1993. 4. 1 教 授 田仲 一成 金沢大学文学部教授に配置換
1993. 4. 1 教 授 戸田 禎佑 東京大学文学部教授に配置換
1993. 4. 1 助 手 林 佳世子 東京外国語大学講師に昇任
1993. 4. 1 笠井 直美 助手(東アジア部門(第二))に採用
1993. 4. 1 山中由里子 助手(西アジア部門)に採用
1993. 5. 18 元教授 田仲 一成 名誉教授の称号授与

1993. 5. 18 元教授 友杉 孝 名誉教授の称号授与
1994. 3. 31 助 手 山之内正彦 停年退職
1994. 3. 31 助 手 小倉 泰 退職
1994. 4. 1 教 授 後藤 明 所長に併任
1994. 4. 1 助教授 丘山 新 教授(東アジア部門(第二))に昇任
1994. 4. 1 助教授 永ノ尾信悟 教授(南アジア部門)に昇任
1994. 4. 1 青木 敦 助手(東アジア部門(第一))に採用
(事務官)
1993. 4. 1 図書第二掛長 佐多 正子 附属図書館情報サービス課国際資
料掛長に配置換
1993. 4. 1 社会科学研究所 栗林 久美子 図書第二掛長に昇任
1993. 4. 1 会計掛主任 岡 徹 会計掛経理主任に配置換
1993. 4. 1 会計掛 瀬見 千恵子 地震研究所経理掛主任に昇任
1993. 4. 1 大型計算機センター 福澤 英子 会計掛給与主任に昇任
1994. 3. 31 総務主任 下野 茂 定年退職
1994. 3. 31 遺跡調査室 古山 學 定年退職
1994. 3. 31 会計掛 常田 信彦 退職
1994. 4. 1 史料編纂所会計掛長 齊藤 齊 総務主任に配置換
1994. 4. 1 業務掛長 鈴木 邦明 先端科学技術研究センター図書掛長に
配置換
1994. 4. 1 法学部継続資料班 飯野 洋一 附属東洋学文献センター業務
掛長に昇任
1994. 4. 1 会計掛給与主任 福澤 英子 保健センター本郷支所事務掛出
納主任に配置換
1994. 4. 1 教育学部附属高等学校庶務掛主任 原 常子 会計掛給与主
任に配置換
1994. 4. 1 庶務掛 齋藤 英二 総合研究資料館庶務掛に配置換
1994. 4. 1 教育用計算機センター総務掛 若林 美由紀 庶務掛に配置換
1994. 4. 1 経理部経理課出納第二掛 秋廣 耕平 会計掛に配置換

IV 財 政 校費・科学研究費等

(1) 校 費 (資料のつごうにより1947年度以降のみ掲載)

年度	決算額(千円)	年度	決算額(千円)	年度	決算額(千円)	年度	決算額(千円)
1947	156	1959	9,315	1971	51,166	1983	210,931
1948	536	1960	9,293	1972	53,236	1984	145,350
1949	1,032	1961	15,474	1973	58,216	1985	142,534
1950	1,491	1962	13,960	1974	58,833	1986	151,085
1951	2,964	1963	15,158	1975	61,674	1987	147,045
1952	2,634	1964	22,218	1976	57,099	1988	149,924
1953	3,393	1965	20,652	1977	64,188	1989	149,695
1954	3,537	1966	34,655	1978	91,354	1990	157,971
1955	3,552	1967	34,409	1979	96,583	1991	146,600
1956	8,451	1968	42,375	1980	95,688	1992	159,039
1957	6,781	1969	34,226	1981	160,431	1993	162,961
1958	7,875	1970	31,187	1982	143,880		

(2) 科学研究費補助金

1992年度

研究種目	交付決定額(千円)	件数
総合研究(A)	9,300	3
奨励研究(特)	1,050	2
	小計 10,350	5
国際学術研究 (学術調査)	20,500	3
国際学術研究 (共同研究)	6,100	2
	小計 26,600	5
合 計	36,960千円	10

1993年度

研究種目	交付決定額(千円)	件数
重点領域研究	7,800	1
総合研究(A)	6,900	3
奨励研究(特)	3,000	4
一般研究(C)	800	1
	小計 18,500	9
国際学術研究 (学術調査)	16,900	3
	小計 16,900	3
合 計	35,400千円	12

(3) その他の経費

以上のほか、「E 内外学術研究・調査」の項で後述するように、順益台湾
 原住民博物館林迺翁文教基金会、二十一世紀文化学術財団、三菱財団、鹿
 島美術財団および高梨財団などより研究助成金を受入れた。

V 施 設

(1) 建 物

- 1941年11月26日 東京帝国大学附属図書館内に新設。
- 1949年1月22日 文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。
敷地面積 5,081.22㎡
本館建物面積 3,012.5㎡ (内1,500㎡程は外務省研修所が使用)
- 1965年10月 本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転。
- 1967年3月 第2期工事完成によりさらに一部移転。
- 1968年 第3期工事完成により全面移転完了。
- 1982年 本所建物の増築が認められ、総合研究資料館庁舎との交換分合を行って、従来の合同庁舎の全館を使用することになる。
建物面積 6,577㎡
- 1984年3月 全面改修工事完成により現在の姿になる。

本研究所の現在の建物は、上記略年表に見られるとおり、1965年度に一部建築され、その後、2度にわたる増築、1回の大改修を経て、今日にいたっている。いまこの建物のかかえる二つの問題点——老朽化と狭隘化——について簡単に指摘しておきたい。

老朽化——建物本体は1965年～68年間に、3次にわたって建てられた。当時の建材、中でもコンクリートの品質が著しく粗悪であったことから、老朽化が急速に進行している。その程度は、本学内の戦前の建物よりかえってひどく、これまで数度となく雨漏り防止対策を繰返してきている状態である。屋上からの雨漏りは常態化している。また内外壁面の劣化とヒビ割れは著しく、その影響で各階床面までヒビ割れが生じ、年々これが大きくなっていく状況である。風向きによっては外壁面ヒビ割れから雨水侵入による被害が2階～4階の低層にも、しばしば、およんでいる。抜本的には、改築以外、方法はなかろうと考えられる。

狭隘化——本研究所の図書保有数は1994年現在、約49万冊であり、今後も毎

V 施 設

年1万冊強増加すると予想される。本学研究所中随一の蔵書量であるが、内容的にも日本のみならず世界中のアジア研究者の貴重な財産である。本所はこのため建物の全スペースの約1/3を書庫としているが、すでに満杯状態である。漢籍複本化計画も始まり、これの保管スペースも確保されねばならず、多数保有する貴重書専用コーナーの設置なども急務である。対外サービス機関として附属東洋学文献センターが付設されているが、その専用の書庫スペースも確保する必要がある。

本研究所は、国際共同研究が進展するにつれ、外国人研究員の受入れが急増しており、これら研究員の研究室不足も深刻化してきている。また本学全体の大学院重点化に即して、本所も大学院教育のより一層の本格化を検討中である。これらの問題に対処するためにも本所のスペース増は必須の課題である。

以上のように、本所の建物問題はきわめて深刻である。全面的に改・増築することが唯一最良の策であろう。早急に対策の講ぜられるべき時機に立ちいたっている。

(2) 防 災

本研究所には、防災対策部が組織され、「警戒宣言」の発令に備えている。総務連絡班・消火班・警備誘導班・救護班の4班からなり、それぞれに担当が決められ、各班に班長と数人の班員が割りあてられている。また、地下1階から地上8階、書庫・屋上・自転車置場の12の区域を設定して、それぞれ各階に防火担当責任者を決めている。各区域はさらに細分され、火元責任者をおいて、防火と防災にあたっている。

VI 図書・資料

(1) 図書

本研究所は、アジア諸地域に関する図書資料を約49万冊、雑誌を約5,400種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く、日本で有数のコレクションである。その他の分野の図書・雑誌も鋭意収集に努め、近年着実に成果をあげている。それら図書資料は広く内外の研究者に公開され、閲覧者数は、年間のべ約12,000名に達している。なお、全学の図書電算化に対応して、本研究所図書室でも電算化を実施するにいたっている。しかしながら、所蔵図書が漢籍、朝鮮語、アラビア語、トルコ語、インドネシア語、サンスクリット語など多岐にわたっているため、特別の所内予算措置により整理などに鋭意努力している状況である。

本研究所蔵の図書・雑誌数は1994年4月1日現在、次のとおりである。

(但し整理中のものは含まれない)

和・中・朝文図書	383,843冊	
欧文図書	108,062冊	計491,905冊
和文雑誌	1,629種	
朝文雑誌	312種	
中文雑誌	2,338種	
欧文雑誌	1,128種	計5,407種

このほか、マイクロフィルム5,100リール、マイクロ・フィッシュ約85,500シートを所蔵する。

主要所蔵図書

〔大木文庫〕 本研究所創設の当初に、大木幹一氏より中国法制関係書総数3,168部、45,452冊の寄贈を受けた。法律のみならず、政治、外交、経済、産業など研究上の貴重書が多く、明治以後の時期の研究にはとくに欠くことのでき

VI 図書・資料

ない蒐集資料である。いわゆる官箴の公牘の類の数百部は、本文庫のひとつの柱梁をなしている。『東京大学東洋文化研究所大木文庫分類目録』は1959年に旧蔵者の稿本に基づき編纂、刊行された。

〔帝国学士院東亜諸民族調査室旧蔵書〕 1944年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない、その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等2,000冊が移管された。このなかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

〔東方文化学院旧図書〕 東方文化学院東京研究所は、1929年に東方文化に関する研究機関として創設され、外務省の所管に属したが、1948年廃された。1967年3月、その旧蔵書と和漢洋書あわせて103,587冊が本研究所に移管された。

〔松本忠雄氏旧蔵書〕 1949年度科学研究費補助金により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書、雑誌など約3,000冊を購入した。これはとくに近代中国研究資料として重要なものを含んでいる。

〔長沢規矩也氏旧蔵書〕 1951・53両年度科学研究費補助金により、長沢規矩也氏旧蔵の約3,000冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類で、貴重書も少なくなく、中国文学研究上重要な資料である。1961年11月本研究所創立20年にあたり、同氏から約150冊の補充を得るとともに、『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

〔清野謙次氏旧蔵書〕 1952・53両年度科学研究費補助金により、清野謙次氏旧蔵洋書750冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする貴重なコレクションであり、1978年3月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

〔矢吹慶輝氏旧蔵書〕 1952年度科学研究費補助金により、矢吹慶輝氏旧蔵洋書約360冊を購入した。英・仏・独のマニ教関係の文献がその中心をなし、他に仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

〔下中文庫〕 下中弥三郎氏より、1953年1月から1957年6月に至るまで、戦後出版の中国書4,500冊、中国雑誌10種および戦後出版の東洋関係洋書130冊の寄贈を受けた。とくに中国書は当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅し、戦後の中国研究に関する重要な資料である。

〔東京銀行調査部旧蔵資料〕 1959・60両年度にわたり、東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和洋書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

〔仁井田陞氏旧蔵書〕 本研究所名誉教授仁井田陞氏の逝去（1966年6月）後、所蔵の中国書5,000冊、洋書120冊、和書2,200冊、清代公私文書類900余点、50基の碑文の拓本を受け入れた。これらの図書資料は、大木文庫とともに旧中国の社会研究にきわめて重要なものである。

〔我妻栄氏旧蔵資料〕 我妻栄氏の逝去（1973年10月）後、所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際、本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数647部932冊の寄贈を受けた。その目録は1982年3月『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』として刊行した。

〔倉石武四郎氏旧蔵書〕 1975年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする蔵書を収蔵することとなり、1981年度までにその重要な部分、漢籍約4,300点などを購入した。

〔江上波夫氏旧蔵書〕 1981・82・84各年度にわたり、本研究所名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち、歴史学、民族学、考古学を中心とした洋書（露文を含む）の一部約2,550点を購入した。

〔Hans Daiber 氏旧蔵写本〕 1986・87両年度にわたり、東洋学文献センターと協力し、オランダの学者ハンス・ダイバー氏の収集した計367点の写本を購入した。主としてアラビア語によって書かれたもので、イスラームの宗教、思想、歴史に関する重要な資料である。1988年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo*, by Hans Daiber を刊行した。

〔文淵閣本四庫全書影印本〕 1988年度に、文淵閣本四庫全書影印本全1,501冊を購入した。四庫全書は、清代以前の中国の古典的文献を網羅した最も基本的な叢書であり、現在、台北故宮博物院の所蔵するところとなっている文淵本原本は、北京紫禁城内に置かれていた正本をなす。今回購入したその全体の影印本は、中国研究上不可欠の重要性をもっており、索引もあるため当研究所に整備することによって、中国研究の一層の発展が期待される。

VI 図書・資料

〔オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報〕 1989年度に、マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。「植民地省公文書索引」は、オランダの国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1850年～1921年）の、手書きの索引書数百巻分を網羅したものであり、「ジャワ官報」は、インドネシアにおけるオランダ植民地政府が1828年～1939年の期間に公布した官報の集成である。

〔乾隆版大蔵経〕 1990年度に乾隆版大蔵経・全724函（毎函10冊）、大清三蔵聖教目録・一函（5冊）を購入した。中国・北京、文物出版社、1989年刊。乾隆版大蔵経は雍正11（1733）年に開刻し、乾隆3（1738）年に完成した中国最後の木版大蔵経である。経・律・論の三蔵と雑蔵の四分よりなり、1657部の仏教典籍が収録されている。明の北蔵の系統をひき、今日、漢文の大蔵経で経版木が保存されているものは、高麗蔵とこの乾隆版のみであり、きわめて貴重な資料である。

〔Ouseley Collection〕 19世紀初めのイギリスの外交官であり東洋学者でもあったG. Ouseley 卿（1744-1844）の旧蔵書の一部。17世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ人のインド、中近東への旅行記とペルシア文学作品を主とした60点、全106冊からなる。当時の建築や社会生活を描写した美しいグラビュールを含む書物が多い点、Ouseley 自身による書き込みが随所に見られる点などからきわめて資料的価値が高いといえる。

〔南アジア伝導教団資料集成〕 南アジア各地で伝導活動を行ったキリスト教団資料で、18世紀末から20世紀までの時期について、年報、諸会議の議事録、往復文書、報告書等を含んでいる。マイクロフィッシュ資料を収集した。

〔Indonesian Monographs, 1945-1973〕 オランダの王立言語・地理・民族学研究所が収集した、独立後インドネシアの社会科学関係出版物3,258点をマイクロフィッシュにまとめたもので、内訳は公共事業・軍事関係611点、経済学498点、政治学307点、教育関係291点、農学289点、開発計画231点、医療・社会福祉158点、法律145点、宗教140点、統計128点など、きわめて多彩である。インドネシア現代史の研究に不可欠の資料集である。

以上の各コレクションのほか、1958年度から3か年にわたって文部省科学研

究費により、総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として、その資料(主として洋書)1,800冊を購入し、さらに1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において、継続して資料の蒐集に努め、総数4,771冊に達した。

(2) 資料

本研究所の所蔵する諸種の資料のうち、重要なものを以下に掲げる。

〔殷代甲骨〕 本研究所蔵甲骨は、次の三部分から成る。第一は、故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で、これは1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で、これは1979年に購入した。第三は、旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し、京都大学人文科学研究所に次ぐ、わが国有数の蒐集である。これは、整理・綴合の上、松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』(東洋文化研究所報告1983年)として刊行された。

〔中国歴史古銭・銭范〕 旧東方文化学院の蒐集品で、殷代の貝貨、戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり、歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と、10点の銭の范模を含んでいる。現在、整理中である。

〔中国考古資料〕 上記の殷墟出土甲骨、古銭以外に、瓦当約110点があり、また鏡、戈、戟、鏃、など青銅器、玉器、土器、磚、磚製買地券、壁画片、俑、仏像、衣服、室内装飾品、土俗品がある。その大部分は旧東方文化学院が購入し、本研究所に移管されたものである。

〔中国絵画資料(原版・焼付写真・カラスライド等)〕 米国、カナダ、欧州諸国、東南アジア諸国の美術館、個人蒐集家が所蔵する中国絵画および日本に現存している中国絵画に関するものが主体となっており、その他に米国シガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真、東京国立文化財研究所原版からの焼付写真等があつて、現在約10万点にのぼり、中国絵画に関する写真資料の蒐集としては世界有数の質量を備えている。これらの資料については、「東洋学文献センター叢刊」として5冊の目録が1977年～83年に刊行され、また

VI 図書・資料

図録は『中国絵画総合図録』（全5巻）として東京大学出版会より1982年～83年に刊行された。

〔中国清代・民国期の文書資料〕 17・18世紀より20世紀におよぶ、北京をはじめ嘉興、武進、蘇州、通州、宝応、鳳山などにおける土地文書を中心とし、その他公私文書類約二千数百点を所蔵している。仁井田陞名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書等を含む。現在東アジア部門の歴史・経済・政治関係者が所外の研究者と協力して整理中であり、その目録と一部の内容は、1983年～86年に『東洋文化研究所所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。

〔内蒙古出土学術資料〕 本研究所名誉教授江上波夫氏が戦前に内蒙古で発掘・採集した資料約1万点が、1983年に寄贈された。これらは主として土器片・陶器片などであり、今日では入手しがたい貴重な資料である。これらの資料の一部は氏のいくつかの論文に掲載されているが、他の圧倒的多数は未発表のものであって、将来の公刊が望まれる。

〔インド・イスラム史跡調査関係資料〕 デリーおよびインド各地に現存するいわゆるサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で、各種サイズの写真、実測図などが主なものである。これらの資料は1959年～62年度に「東京大学インド史跡調査団」が実施した3回にわたる現地調査の成果の一部で、とくにニューデリーとその周辺地域の建造物は今日消滅してしまったものが多く、それらについての資料は、諸外国には見られない貴重なものである。

〔西アジア考古資料〕 人類文明の起源、東アジアおよび日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究を目的として、1956年以来、「東京大学イラン・イラク遺跡調査団」がイラン・イラク両国における遺跡14か所の発掘・調査の結果収集したものである。その数は数万点に達し、これらはここ10年来各国が遺物の分与、流出を厳禁している今日では甚だ貴重な資料である。特にその大部分は発掘品で、考古学上第一級資料である。

VII 電算化の進展状況

本研究所における電算化は、1970年代より進行し、現在パーソナル・コンピュータ58台、ワークステーション IBM-7012-320型1台が、配置されている。これらのパソコンとワークステーションは、東京大学 UTNET を通じて、全学につながっている。

現在ほとんどの部門で、電算機を重要な手段とする研究が進んでいる。汎アジア部門では、東アジア・日本の政治動向のシミュレーションやスライド資料の電算機管理が行われ、東アジア部門では、世界各地に所在する中国絵画の検索目録の作成・道教文献の集成・中国明清期行政文書のデータベース化などが進み、南アジア部門では南アジア文献検索目録の作成・インド古典文献のデータベース化・インド土地登記簿の分析・インドネシア村落調査の集計などで、大量データの電算機による処理が行われ、すでにいくつかのデータベースが作成されている。本研究所の蔵書は、アジア諸地域の言語による文献が中心をなしているため、現時点ではそれをすべて電算化することには大きな困難があるが、学術情報センターのネットワークに参加して、ヨーロッパ言語や日本語文献を中心にして図書目録を端末をとおして入力しているほか、研究者のために文献所在情報検索を行っている。

附属東洋学文献センターは、長期プロジェクトとして研究所蔵書のデータベース化ならびにアジア研究のレファレンスの電算化に取り組んでいる。すでに93年度に研究所所蔵『現代中国書分類目録』のためのデータベース入力を開始し、94年度には、同書の入力作業および検索システムを完成する予定である。また、『全国朝鮮関係書所蔵目録』『東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所漢籍目録合併四角號碼索引 増補』等も94年度末に準備作業を終え、入力を開始する予定である。

VIII 研究活動

A 部門研究

汎アジア部門

原 洋之介 猪口 孝 田中 明彦
友杉 孝 (93年3月まで) 松井 健
末成 道男 関本 照夫 福嶋 真人 (93年3月まで)
岡本 サエ

汎アジア部門はアジアという対象を、経済学・政治学・人文地理学・文化人類学・比較思想という社会科学・人文科学の広い範囲にわたり、個別専門分野ならびに学際領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。この部門は日本も重要な研究対象としている。経済・統計研究分野は、アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を行っており、この研究を通じて、アジア諸国経済発展のアジア域内および世界における国際的位置づけを明らかにするとともに、欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。

原は、東南アジアに重点をおいて研究を進めており、同地域諸国における国民経済の形成を、タイ・インドネシア・フィリピン・ビルマの比較研究を通じて分析し、それを『東南アジア諸国の経済発展』（東洋文化研究所報告）として刊行した。以後、東アジアや南アジアとの比較により、アジア経済の中での東南アジア経済の位置と特徴を明らかにするべく研究を進めている。

国際政治分野では、アジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。猪口は、国際も国内も、政治も経済も総合した視点で日本を中心とした、東アジアの国内・国際政治研究を行ってきている。第一に、日本の対外対策を中心としたもので、英文書 *The Political Economy of Japan: The Changing International Context* (Stanford University Press, 1988, coedited

with Daniel Okimoto), *Japan's International Relations* (Pinter Publishers/Westview Press, 1991), *Japan's Foreign Policy in an Era of Global Change* (Pinter Publishers, 1993) を刊行した。日本文では、『現代国際政治と日本』(筑摩書房 91年), 『現代日本外交』(筑摩書房 93年) を刊行した。第二に, 東アジアの国家と社会の比較研究である。その理論的枠組みとして『国家と社会』(「現代政治学叢書」東京大学出版会, の第一巻でもあり, この叢書は猪口孝を企画編集責任になるもので, 94年3月末現在で17巻刊行されている) を1988年に刊行した。また, 「シリーズ東アジアの国家と社会」(猪口孝を企画編集責任として東京大学出版会から全6巻, 中国, 台湾, 北朝鮮, 韓国, ベトナム, 日本について刊行) が1993年から94年にかけて刊行された。猪口は全巻の編集にあたりると同時に, 『日本——経済大国の政治運営』を刊行した。ほかに, 『アジア太平洋の戦後政治』(朝日新聞社 93年), 政治学術誌『レヴァイアサン』の編集に関わり, 「比較政治体制論——東アジアと日本」, 「土地問題と日本政治」, 「冷戦後の日本外交」の特集号を担当した。

田中は, 世界システム全体の動向との関連で東アジアの国際政治を研究してきている。第一に, 世界システム全体の変化を理論的に検討しており, これまで政治と経済の関係を中心に研究を進めてきたが, 今後は, とりわけ政治・経済の変化と技術および思想の変化がどのように関連しているかを重点に研究を進める予定である。第二に, 現代の東アジアにおける主要国間の国際政治を理論的・実証的に分析している。

人文地理学研究分野は, アジア諸地域におけるフィールドワークに基づいて, 社会の全体像を描き, 同時に記述にかかわる理論研究を推進するとともに, 地域研究の深化を目指す。この作業のために, 狭く人文地理の枠にとらわれることなく, 積極的に隣接諸科学に関与し, 脱領域の研究を志向する。人文地理における, 限定された時間的空間的な領域についての精緻な記述的研究は, 分析的な考究によって一般的な理論研究に貢献し, その位置を自己確認する作業を通して, 広大な時空間にまたがるアジア地域の自然と文化の統合的全体を展望することを要請することになる。

VIII 研究活動

友杉は、これまで行ってきたタイ農村社会の研究にくわえて、スリランカの一地方都市ゴールについて記述した。都市景観を手がかりにして、商業、社会統合、祭祀などが未分化のまま、あるいは相互に複雑に関与してつくる多様な意味の世界と現実世界を統一的に描写することがもとめられている。このようなゴールの記述はこの都市の歴史的個性の把握の試みでもある。ゴールでの試みをふまえて、ヨーロッパ都市の研究蓄積を参照しつつ、アジア諸都市の都市比較類型論を志向している。

松井は、西南アジア地方、とくにパキスタン・マクラーン地方のナツメヤシ・オアシスの生業、社会構造と18世紀以後の政治史のかかわりを、フィールドワークとその成果に立って文献読解から明らかにしようとしている。この仕事を通して、遊牧民一般の文化的特質を画定し、イラン系遊牧民研究のフレームワークを抽出することを目論んでいる。さらに、琉球列島宮古群島の祭祀研究の延長上にエスノ・ヒストリーの視座からの考察を導入するために、伝統的な井泉についての実地調査を行っている。認識人類学を手がかりとする文化記述の理論研究も続行している。

文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし、ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて、下からあるいは周縁から、よりマクロな社会の全体像を見透そうとしている。

末成は、日本・韓国・台湾・中国大陸・ベトナムにおける村落の社会人類学的な現地調査に基づき、家族、親族を中心とする人間関係の特質を祖先祭祀や廟における祭祀活動を通して研究してきた。また、社会人類学のミクロな場での観察資料に加え、様々の記録資料を利用することにより、歴史学の研究とどのような相互協力関係が可能なのかを追求することにも強い関心を持っている。こうした活動の一環として日本の人類学における中国研究論文集 *Perspectives on Chinese Society: Views from Japan*. (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) を刊行した。

関本は、インドネシアでの現地調査にもとづき、村落社会を律する社会関係

の特質、さらに権威やヒエラルキーを支える観念と行為の特質を明らかにせんとしてきた。現在はさらに、南米スリナムのジャワ人社会での調査の成果も加え、近代世界の国民社会や民族集団が作る文化像の政治作用を研究している。

福嶋は、同じくインドネシアでの調査にもとづき、制度的中心に対立するイスラムの運動や農民の反抗運動を研究し、言語秩序と政治的・宗教的ヒエラルキーとの係わりを追究している。

比較思想研究分野は、東アジアの思想交流の中にみられる、漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

岡本は、前近代の中国精神史を比較思想の視角から研究している。この主題へのアプローチとして、第一に、清代禁書の総合的研究により明末清初の漢人文化が満人王朝の下でいかなる変遷を遂げたかを解明し、第二に、東アジア・ヨーロッパ文化交流における中国人の文化摩擦について欧文資料と漢籍から系統的に追跡している。

東アジア部門（第一）

松丸 道雄 平勢 隆郎(92年10月から)

宮嶌 博史 川村 康

濱下 武志 黨 武彦(92年10月から)

青木 敦(94年4月から)

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像をめざすことは言うまでもない。研究分野としては、経済・社会、政治過程、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「殷周社会の総合的研究」「戦国六朝間出土文献史料とその歴史的背景」「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」「朝鮮伝統社会の構造とその変容」の四つの研究班を組織し、本学内外の協力を得、継続

VIII 研究活動

して研究をすすめている。

時代順に述べれば、松丸は、殷周時代の国家・社会構造や精神構造を考究している。すでに刊行した『甲骨文字 図版編』をもとに、本研究所蔵の甲骨資料の整理分析を続けた。一方では、高嶋謙一（～90年8月）との共編『甲骨文字字釋綜覧』につき、同氏の帰国後、共同研究班の構成員を中心に、内外の協力を得て精力的に校正作業を進め、刊行した。

平勢は、春秋戦国時代の歴史的性格を考究する。転任後当該時代の史料批判をすすめ、その研究成果の一部を東文研紀要などに公表した。また、以前から実地踏査の上検討を進めてきた我国江戸時代の亀趺碑資料を整理し、東文研紀要に公表している。

川村は、中国法制史を専攻し、宋代を中心として研究を進めている。家族法領域では、入婿の法的地位を論じて宋代家族法の解明を進め、刑罰法の領域では、唐律的五刑と、杖刑を中心とした宋代刑罰体系との関係およびその移行過程、ならびに宋代における律の役割解明を進めた。法典編纂の領域では、『慶元条法事類』の解題的研究を公表した。

青木は、10～13世紀中国の政治・経済、ことに宋金両朝の中央地方関係を地方行政制度および官僚制について研究する。中央集権の強固さよりは、行政と民間、中央と地方の関係の密度に本質を見いだそうとする。州県知事の人事掌握に注目して罷免事例の計量的研究を進め、指令的な財政運営を破壊する側面もある南宋の羨余等について検討している。

濱下は、19世紀を中心とする中国と欧米との経済関係の研究に従事し、海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき、貿易および金融問題の研究を進めている。東南アジア華人と中国華南との歴史的結びつきを、香港に焦点を当てて研究・調査し、その研究成果の一部を公表した。

黨は、中国明清史を専攻する。明清期中国における地域差の問題ならびにその中での中国北部地域の位置、中国王朝が諸問題に対処する過程における文書行政の特質と権力との関係を課題とする。これらについての研究成果を公表する一方、東洋学文献センターにおいて研究所蔵の現代中国書蔵書目録のデータ

ベース化、『漢籍整理参考資料』の改訂作業を進めた。

宮嶌は、朝鮮の社会経済史を専攻し、李朝期から植民地期にかけての土地制度や農村社会の構造変動に関する研究を進めている。韓国の研究者と共同して、李朝期の古文書や植民地期の水利組合関係資料の発掘を行うとともに、それらの資料を用いた研究成果を公表した。

東アジア部門（第二）

蜂屋 邦夫 丘山 新

田仲 一成（93年3月まで）丸尾 常喜

山之内正彦（94年3月まで）笠井 直美（93年4月より）

戸田 禎佑（93年3月まで）小川 裕充 林 秀 薇

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、美術を研究対象とする部門で、とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として、各分野にわたって総合的に研究することを目的としている。

一般的に中国では、権力エリートと文化エリートとは分離せずに癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返して行い、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ、同時に強く意識されなかったにせよ、そこには反権力的指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが、その状況はかなり複雑である。「庶民文化」は六朝期から唐末までに形成され、宋元以後にめざましく発展し各地方に広がっていたと考えられる。この課題に対して、各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し、共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では、蜂屋は、思想の内在的理解のため文献の正確な読解を努めながら、とくに東晋時代の思想を検討した。また、『儀禮疏』の研究を推進し、「士冠疏」三卷「士昏疏」三卷の訳注を完成しこれを刊行した。さらに全真教などの道教の思想について考察し、現地における実情の研究にも着手し

VIII 研究活動

て、陝西省・四川省などにおける道教の現状について、報告書『中国道教の現状——道士・道協・道観』（本文冊・図版冊）を刊行し、ひきつづき現地調査を遂行している。一方、12世紀における全真教発祥の問題を研究し、東文研報告『金代道教の研究——王重陽と馬丹陽』を刊行した。

丘山は、中国における仏教經典の翻訳とその受容に関する研究をすすめている。翻訳については、漢訳本をサンスクリット本・パーリ本・チベット本訳本などと対照し、漢訳仏典の語彙・語法的特徴を解明しつつある。それらは、『長阿含経・訳注』として刊行される予定である。また、漢訳仏典の受容に関しては、インド・西域伝来の各經典がどのような関心から中国に受容されていったかという視点から、中国六朝期の時代思潮を探ろうと試みている。

次に文学研究分野では、古来、稗官小説流として蔑視された民間文学はエリートの上流文学に対立して存在していたが、六朝期以後、説話・歌謡などのジャンルを分岐させつつ、権力批判的指向の強い文学を形成していた。この流れは唐宋以後、質的には上流文学をむしろ凌ぐ勢いで、戯曲・小説を展開させ、近世初期から近代に至る。文学研究分野ではこの展開過程を考察することを課題としている。

田仲は、中国の地方演劇史を研究し、宋元より明清に至る地方演劇の記録を詳細に調べ、中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとする。とくにこの数年来、香港、台湾、シンガポール、マレーシアなどに見られる華南（閩粵）系演劇の調査を連続して行い、文献資料との関連を考察している。また閩粵社会全体に視野を広げる必要から、他分野の専門家の協力を得て『華南の地域社会と地方文学』について総合的な検討を試みた。

丸尾は、中国現代文学を研究し、とくに魯迅における個と民族の連関に着目しつつ、その文学および思想の形成・展開の跡を通時的に追究する一方で、個別な作品論を積み重ねているが、近年はその文学にあらわれる「鬼」の表象に注目し、魯迅文学における伝統と近代の接点の内在的な解明を試みている。そのほかに中国小説の歴史的考察をすすめている。

山之内は、李商隱を中心として中国晩唐詩人の抒情の構造を時代的背景との

関連に注目しつつ研究している。また、所外の学徒とともに、唐詩に現われる植物関係語彙の採集・分析を行っている。

笠井は、中国俗文学を研究し、特に『水滸伝』およびそれに関連する戯曲・説唱等を中心に、庶民色の濃いこのジャンルの特性を活かして、「秩序」や「正しさ」に関わる当時の認識のあり方について追究を試みている。

美術研究分野では、長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し、その写真史料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを既に刊行したので、現在はその補足調査を継続している。また、既に刊行済みの上記作品目録をデータ・ベース化して、個々の作品の画像処理をも含めた中国絵画研究資料システムを構築する準備を進めている。戸田・小川・林の3名は、これらの基礎的作業を共同して行う一方、戸田は、宋元の羅漢十王図を中心とする仏画と元代道釈画とを研究し、小川は、唐宋時代から元代の山水画を主な研究対象としている。また、林は、宋元時代の水墨系の道釈画の系統的分類を行いつつ、宋元絵画にあらわれた文人的要素の意義を人物画・山水画の両面から考察している。

南アジア部門

柳澤 悠 加納 啓良

上村 勝彦 永ノ尾信悟 小倉 泰(94年3月まで)

南アジア部門は、東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ、欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て、戦後にあいついで独立した諸国からなる地域であるので、今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため、本部門は政治・経済・社会・文化などにわたって過去現在の両者を総合的に研究している。

本部門では、とくに「南アジア支配体制と社会構造」を課題として研究を進めてきた。このため、所外の研究者の協力を得て研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起し、それについて実証的かつ理論的に検討を行って

VIII 研究活動

る。

経済研究分野では、南アジアに関して、柳澤は、19世紀以降の南インド農村の土地税関係文書など政府公文書を収集して分析するほか、南インドの一つの郡の約60の村落の土地査定台帳を電算機を使って分析した。それらの分析に基づき、19世紀から20世紀後半にいたるまでの時期の農村社会の構造的変化を検討し、その成果を東文研報告『南インド社会経済史研究』として刊行した。また、手織物業など南インドの在来手工業に注目して、カーストなど社会関係の変容が工業品への需要にいかに関与したかを検討し、1920年～30年代の南インドの農村工業発展の要因をそこに見出そうと考察を加えている。

東南アジアに関しては、加納は、インドネシアの経済を研究し、ジャワ農村の土地所有、農業労働、労働移動などの現状に関する調査の成果を整理・分析するとともに、19世紀以降のインドネシアの経済史の研究をも進めている。また1990年～92年度には、オランダ、インドネシア両国の研究者と協力して、ジャワの北海岸地域の一地方の過去1世紀間の社会経済変化に関する国際共同研究プロジェクトを実施し、その研究成果を公表しつつある。

宗教・文化の分野では、上村は、叙事詩『マハーバーラタ』の翻訳を続行するとともに、詩論『ドゥヴァニ・アーローカ』の研究をすすめている。

永ノ尾は、ヒンドゥー教の年中儀礼の研究を中心に研究を行っている。インドの各地には1年を通じて様々な年中行事が行われている。国勢調査の村落調査報告、文化人類学者のフィールド調査報告などによって現在の状況を把握し、それらの年中儀礼の記述の歴史をダルマニバンダ文献やプラーナ文献の資料にもとづいて辿っていく。その研究を通じてヒンドゥー文化の歴史的な重層性および各地方の特殊性を見いだそうとしている。

小倉は、ヒンドゥー寺院建築の象徴性の問題をテーマとして、特に南インドの寺院に関して研究を行った。一方で、祭式の網要書であるアーガマ文献群に記述された儀礼に注目して、寺院を建築する行為の背景にある宗教的意味について考察するとともに、建築職人の手引き書であるヴァーストゥシャーストラと呼ばれる文献群の規定がいかなる程度まで実際の建築に適用されたかについ

て、設計技法を中心に分析してきた。

西アジア部門

鈴木 董

松谷 敏雄 羽田 正 山中由里子(93年4月より)

後藤 明 鎌田 繁 林 佳世子(93年3月まで)

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆる中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握することが本部門の目標である。

西アジア地域は、古代文明の発祥の地として、またその後の長い歴史過程における東西文化交流の結節点として、世界史上に重要な位置を占めてきた。同時に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という一神教の主要な伝統を生んだ地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし、広く諸地域に浸透して多大な影響を及ぼしている。したがって、現在の世界の政治、経済、社会、文化にかかわる多角的な諸問題は、国際的見地からみても、とりわけ西アジア地域に集約的にあらわれているのである。本部門では以上の諸問題をいくつかの専門分野で共同して研究をしている。

経済・政治研究分野に、鈴木が所属している。鈴木は、オスマン帝国史を専攻し、政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して、軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに、実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から、現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察を行っている。さらに、オスマン帝国の帝都イスタンブールの政治社会史的な位置づけについて考察している。

次に、歴史・考古研究分野に松谷、羽田、山中が所属している。松谷は、西アジアにおける農耕・牧畜という食料生産経済の開始に関して研究をしている。これは、1956年度より本研究所が主宰してきた「東京大学イラン・イラク遺跡

VIII 研究活動

調査団」の現地研究を引き継ぐものであり、両国における発掘調査を踏まえ、近年の国際情勢の変化にともない、イラクに隣接するシリアにフィールドを移し、実証的に考究しようとするものである。

羽田は、イスラム期イラン史において、トルコ・モンゴル系遊牧部族が果たした役割に注目し、彼らのイラン社会に与えた影響を分析してきた。また、政治・社会・文化の三方向から前近代イラン・イスラム世界の特徴を明らかにし、これをイスラム世界史の中に正しく位置付けることを試みている。さらに海外学術現地調査によって、広くイスラム世界全域における宗教建築の建築史的研究を行っている。

山中は、比較文学比較文化の視点から、中東イスラム世界に伝播した「アレクサンドロス物語」（大王の生涯にまつわる伝説的物語）について研究を行っている。異なる民族集団の間に伝わった文学的モチーフを題材として文化圏同士の交流の諸相を明らかにしようとしている。

宗教・文化研究分野には、後藤、鎌田が所属し、林が93年3月まで所属していた。後藤は、従来行ってきたムハンマド伝の研究およびムハンマド時代のアラブ社会・文化の研究をふまえて、それを発展させ、一方でイスラームの思想の枠組みが形成されてきた過程を歴史的に分析することを試みた。また、中東地域の歴史研究を基礎にして地球規模の人類史の見通しを得ようと努力している。鎌田は、イスラムの宗教思想研究に携わりイスラムの伝統的思想家の思索の枠組を把握してその特質を明らかにすることを目指している。イラン・シーア派（十二イマーム派）の神秘主義的哲学者モッラー・サドラーおよび彼につながる思想家の霊魂観、世界観、イマーム論を明らかにしようとする努力をしている。

林は、イスラム都市社会史を専攻し、オスマン朝期のイスタンブルを対象として、その社会構造に関する研究を行った。とくにワクフの問題に着目し、関連史料の基礎的研究を行うとともに、イスラム都市形成に果たしたワクフ制度の役割について考察を行った。

1993年度研究計画

汎アジア部門 アジア諸地域における社会・文化の変容過程

- I. アジア諸社会の固有文化とその変容
 1. 末成 道男 東アジア社会の変容過程
 2. 関本 照夫 インドネシア社会の統合過程
- II. アジア諸国際経済発展の比較研究
 3. 原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易
- III. アジアにおける政治変動と国際関係
 4. 猪口 孝 西太平洋諸国における政治経済変動と国際政治経済
 5. 田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治
- IV. アジアにおける都市と農村
 6. 松井 健 西南アジアの都市と遊牧民
- V. アジアにおける思想・文化の比較研究
 7. 岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門

- I. 東アジアにおける国家権力と社会経済構造
 1. 松丸 道雄 中国古代国家の形成
 2. 平勢 隆郎 中国古代帝国の形成
 3. 川村 康 唐宋時代の法制度
 4. 黨 武彦 清代中国の社会経済
 5. 濱下 武志 中国近代の経済発展
 6. 宮脇 博史 近代朝鮮の社会経済構造
- II. 東アジアにおける庶民文化の形成と展開
 7. 蜂屋 邦夫 庶民における三教思想の受容
 8. 丘山 新 仏教經典の民衆化
 9. 丸尾 常喜 中国近代文学における民衆文化の諸問題
 10. 山之内正彦 明清の歌謡

VIII 研究活動

11. 笠井 直美 水滸説話の形成と展開

12. 小川 裕充 明清の職業画家

13. 林 秀 薇 宋元の道釈画

南アジア部門 南アジアにおける支配体制と社会構造

1. 永ノ尾信悟 古代インド社会と祭式

2. 上村 勝彦 古代インドの文学と社会

3. 小倉 泰 中世インド寺院と社会

4. 柳澤 悠 近現代インドの経済構造

5. 加納 啓良 インドネシアにおける植民地支配と農業問題

6. 原 洋之介 東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門 西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1. 鈴木 董 オスマン帝国の政治社会史的研究

2. 松谷 敏雄 北シリアにおける農耕・牧畜の起源について

3. 羽田 正 イラン・イスラム社会の特徴

4. 山中由里子 西アジアにおける英雄物語の比較研究

5. 後藤 明 初期イスラム社会史

6. 鎌田 繁 イスラム神秘思想の構造と展開

1994年度研究計画

汎アジア部門 アジア諸地域における社会・文化の変容過程

I. アジア諸社会の固有文化とその変容

1. 末成 道男 東アジア社会の変容過程

2. 関本 照夫 インドネシア社会の統合過程

II. アジア諸国経済発展の比較研究

3. 原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易

III. アジアにおける政治変動と国際関係

4. 猪口 孝 西太平洋諸国における政治経済変動と国際政治経済

5. 田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

IV. アジアにおける都市と農村

6. 松井 健 西南アジアの都市と遊牧民

V. アジアにおける思想・文化の比較研究

7. 岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門

I. 東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1. 松丸 道雄 中国古代国家の形成
2. 平勢 隆郎 中国古代帝国の形成
3. 川村 康 唐宋時代の法制度
4. 青木 敦 宋元時代の政治と社会
5. 黨 武彦 清代中国の社会経済
6. 濱下 武志 中国近代の経済発展
7. 宮嶋 博史 近代朝鮮の社会経済構造

II. 東アジアにおける庶民文化の形成と展開

8. 蜂屋 邦夫 庶民における三教思想の受容
9. 丘山 新 仏教経典の民衆化
10. 丸尾 常喜 中国近代文学における民衆文化の諸問題
11. 笠井 直美 水滸説話の形成と展開
12. 小川 裕充 明清の職業画家
13. 林 秀 薇 宋元の道釈画

南アジア部門 南アジアにおける支配体制と社会構造

1. 永ノ尾信悟 古代インド社会と祭式
2. 上村 勝彦 古代インドの文学と社会
3. 柳澤 悠 近現代インドの経済構造
4. 加納 啓良 インドネシアにおける植民地支配と農業問題
5. 原 洋之介 東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門 西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1. 鈴木 董 オスマン帝国の政治社会史的研究

VIII 研究活動

2. 松谷 敏雄 北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
3. 羽田 正 イラン・イスラム社会の特徴
4. 山中由里子 西アジアにおける英雄物語の比較研究
5. 後藤 明 初期イスラム社会史
6. 鎌田 繁 イスラム神秘思想の構造と展開

B 長期国際共同研究

本研究所をあげて取組む二つの長期研究のプロジェクトを、1993年度より開始した。今日のアジアの激動の焦点であるイスラーム圏と中国を中心にして、南アジア、東南アジア、中央アジア、東北アジアをも、イスラームと中国という2つの切り口から分析することを目指している。

中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究

委員長 濱下 武志

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 松丸 道雄 | 11. 林 秀 薇 |
| 2. 宮嶋 博史 | 12. 笠井 直美 |
| 3. 平勢 隆郎 | 13. 加納 啓良 |
| 4. 川村 康 | 14. 重松 伸司 |
| 5. 黨 武彦 | 15. 鈴木 董 |
| 6. 黒田 明伸 | 16. 末成 道男 |
| 7. 蜂屋 邦夫 | 17. 岡本 サエ |
| 8. 丸尾 常喜 | 18. 原 洋之介 |
| 9. 小川 裕充 | 19. 猪口 孝 |
| 10. 丘山 新 | 20. 田中 明彦 |

激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究

委員長 鈴木 董

- | | |
|----------|----------|
| 1. 平勢 隆郎 | 10. 後藤 明 |
|----------|----------|

- | | |
|----------|-----------|
| 2. 黨 武彦 | 11. 鎌田 繁 |
| 3. 丘山 新 | 12. 羽田 正 |
| 4. 上村 勝彦 | 13. 山中由里子 |
| 5. 柳澤 悠 | 14. 小杉 泰 |
| 6. 加納 啓良 | 15. 木村 喜博 |
| 7. 永ノ尾信悟 | 16. 原 洋之介 |
| 8. 小倉 泰 | 17. 関本 照夫 |
| 9. 松谷 敏雄 | 18. 松井 健 |

C 班研究

1993年度研究計画

東アジア研究における人類学と歴史学の接点 主任 未成

- | | |
|----------|------------|
| 1. 宮永 國子 | 日本・宗教人類学 |
| 2. 未成 道男 | ベトナム・社会人類学 |
| 3. 嶋 陸奥彦 | 韓国・社会人類学 |
| 4. 王 崧 興 | 台湾・社会人類学 |
| 5. 瀬川 昌久 | 香港・文化人類学 |
| 6. 桐本 東太 | 中国・古代史 |
| 7. 上田 信 | 華中・社会史 |
| 8. 片山 剛 | 華南・経済史 |

アジア諸社会における文化像の生産と消費 主任 関本

- | | |
|----------|------------|
| 1. 関本 照夫 | 集団と文化の自己主張 |
| 2. 松井 健 | 文化の理論 |
| 3. 船曳 建夫 | 演劇 |
| 4. 山下 晋司 | 観光 |
| 5. 中村 雄祐 | 大衆音楽 |

VIII 研究活動

6. 内堀 基光 神話の再生産
7. 落合 一泰 写真
8. 富沢 寿勇 文化政策
9. 葛野 浩昭 少数民族の位置
10. 塩田 光喜 口承芸能
11. 清水 展 経典宗教
12. 福嶋 真人 宗教運動

構造調整下のアジア経済の展望

主任 原

1. 原 洋之介 構造調整と国際経済
2. 杉本 義行 構造調整と国際貿易
3. 今岡日出紀 構造調整とマクロ経済
4. 藤田 夏樹 構造調整と産業構造
5. 新谷 正彦 構造調整と技術変化
6. 永田 信 構造調整と資源保全
7. 福井 清一 構造調整と農村経済
8. 石田 正昭 構造調整と農業成長
9. 本台 進 構造調整と産業組織
10. 田嶋 俊雄 構造調整と中国経済

東アジアの国家と社会

主任 猪口

1. 猪口 孝 東アジア国家と社会の比較理論枠組
2. 徳田 教之 中国の政治構造
3. 石井 明 中国の内政と外交
4. 国分 良成 中国の政治過程
5. 天児 慧 中国の社会変動と政治
6. 若林 正文 台湾の政治
7. 白石 昌也 ベトナムの国家と社会
8. 五島 文雄 ベトナムの政治指導
9. 小此木政夫 朝鮮半島の政治外交指導

10. 鐸木 昌之 北朝鮮の国家と社会

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治

主任 田中

1. 田中 明彦 米国の対アジア外交
2. 猪口 孝 日本の対アジア外交
3. 山影 進 アセアンの国際政治
4. 小島 朋之 中国の対外政策
5. 古田 元夫 ベトナムの民族問題と外交
6. 伊豆見 元 朝鮮半島の国際政治
7. 黒柳 米司 アセアンの内政と外交
8. 岩田 賢司 ロシアの対アジア外交
9. 谷垣真理子 香港をめぐる国際政治
10. 小泉 直美 ロシアの内政と外交
11. 藤井 新 北朝鮮の内政と外交

比較文化研究の方法

主任 岡本

1. 加藤 祐三 「比較」と「関係」の理論
2. 関本 照夫 文化間比較の可能性
3. 田辺 勝美 世界美術の中の日本文化
4. 宮嶌 博史 東アジア比較経済社会論
5. 佐藤 慎一 近現代中国における政治と文化
6. 岡本 サエ 中国研究と比較の視点
7. 吉田 忠 科学思想における比較研究
8. 加納 啓良 東南アジア比較経済史 1
9. 原 洋之介 東南アジア比較経済史 2
10. 小倉 泰 南インドと東南アジアの思想交流
11. 清水 学 イブンハルドゥーンの再検討
12. 鈴木 董 西欧世界とオスマン帝国の交渉史

殷周社会の総合的研究

主任 松丸

1. 松丸 道雄 殷王朝の精神的基盤

VIII 研究活動

2. 豊田 久 甲骨文から見た殷代地方支配の構造
3. 量 博満 殷代の墓葬から見た社会
4. 高山 節也 殷周革命と周礼
5. 持井 康孝 殷周時代の地方勢力とその文化的基盤
6. 武者 章 新出青銅器より見た殷周古代国家の成立と展開
7. 飯島 武次 周原地域出土土器の性格
8. 西江 清高 周系土器の変遷より見た西周文化の成立と発展
9. 竹内 康浩 西周青銅器を通して見た西周王朝支配の実態

戦国六朝間出土文献史料とその歴史的背景

主任 平勢

1. 平勢 隆郎 六国文字と戦国社会
2. 福井 重雅 簡牘から見た漢代官吏登用制度
3. 尾形 勇 出土文献史料による国家構造の検討
4. 窪添 慶文 石刻史料から見た北朝鮮社会
5. 影山 輝国 漢代帛書に関する思想史的考察
6. 谷 豊信 考古史料から見た漢代社会
7. 飯島 秀幸 雲夢秦簡と秦代社会

道家道教思想の総合的研究

主任 蜂屋

1. 蜂屋 邦夫 道教の文献研究と現地研究
2. 高橋 忠彦 道教思想の形成過程
3. 原田 二郎 道教の養生思想と中国医学
4. 池田 知久 六朝隋唐における老荘注釈学
5. 中嶋 隆蔵 六朝隋唐における道教経典
6. 松岡 栄志 六朝文学よりみた道家道教思想
7. 丘山 新 仏典の翻訳と道教思想
8. 末木文美士 道教における仏教思想の影響
9. 菅野 博史 道教思想と仏性思想
10. 松川 育代 唐代の儒学と道家思想
11. 吉田 純 儒学における道教思想の影響

12. 藤本 幸夫 朝鮮文献よりみた道教思想

東アジアにおける仏教經典の受容

主任 丘山

1. 丘山 新 仏典の翻訳論
2. 神塚 淑子 漢訳仏典と道教
3. 河野 訓 中国における仏典の翻訳史
4. 水上 文義 隋唐における漢訳仏典の思想的展開
5. 岩松 浅夫 漢訳仏典の語彙・音韻的研究
6. 辛嶋 静志 プラークリット仏典の研究
7. 下田 正弘 インドにおける大乘經典の成立史

華南の地域社会と地方文学

主任 丸尾

1. 末成 道男 広東・台湾客家の習俗
2. 濱下 武志 広東の経済と地域社会
3. 戸倉 英美 広東の民謡（山歌）と民話
4. 西川喜久子 広東の宗族
5. 大里 浩秋 閩粵の秘密結社
6. 岡本 サエ 閩浙の文人結社
7. 丸尾 常喜 江南の習俗と近代文学
8. 山之内正彦 江南の風物と唐宗の詩詞
9. 笠井 直美 江南の民間伝承
10. 大木 康 江南の説唱
11. 廣瀬 玲子 江南の戯曲
12. 松岡 俊裕 江南の文人
13. 大塚 秀高 江南の小説
14. 高島 俊男 盗賊と社会・文学

中国一九三〇年代の文学

主任 丸尾

1. 芦田 肇 茅盾と鄭振鐸
2. 伊藤 徳也 周作人とその周辺
3. 尾崎 文昭 三〇年代の北京の文学状況

VIII 研究活動

4. 菊田 正信 三〇年代の国語問題
5. 近藤 龍哉 胡風をめぐる諸問題
6. 佐治 俊彦 三〇年代の演劇
7. 坂井 洋史 巴金とアナキズム運動の周辺
8. 鈴木 正夫 郁達夫とその周辺
9. 藤井 省三 三〇年代の上海の文学状況
10. 丸尾 常喜 新文学と伝統社会
11. 刈間 文俊 三〇年代の映画と演劇
12. 代田 智明 魯迅をめぐる諸問題

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任 濱下

1. 濱下 武志 17世紀以降東アジア経済の展開
— 欧米の公私文書分析を含めて —
2. 川村 康 旧中国社会の法構造
3. 黨 武彦 明清期公私文書の社会経済的分析
4. 岸本 美緒 明清期経済の動態と意識の構造
5. 上田 信 明清契約文書より見た社会関係
6. 寺田 浩明 明清期の契約法慣習の論理
7. 張 士 陽 明清期台湾公私文書分析
8. 臼井佐知子 清末契約文書の社会経済史的分析
9. リンダ・グローヴ 民国時代公私文書より見た農村経済
10. 久保 亨 民国時代公私文書より見た経済構造
11. 宮脇 博史 朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任 小川

1. 小川 裕充
 2. 林 秀 薇
 3. 戸田 禎佑
 4. 関口 正之
 5. 海老根聡郎
- 特に専門別の分担を定めず、本年は東アジア圏および日本の公私コレクションに所蔵される中国画の調査を重点的に行う。

6. 嶋田 英誠
7. 湊 信幸
8. 宮崎 法子
9. 藤田 伸也
10. 救仁郷秀明
11. 井手誠之輔
12. 板倉 聖哲

朝鮮伝統社会の構造とその変容—方法論的探究

主任 宮嵜

1. 武田 幸男 李朝・身分制
2. 吉田 光男 李朝・社会史
3. 小川 晴久 李朝・思想史
4. 山内 弘一 李朝・思想史
5. 吉野 誠 開港期・経済史
6. 趙 景 達 開港期・思想史
7. 康 成 銀 開港期・政治史
8. 宮嵜 博史 植民地期・経済史
9. 宮田 節子 植民地期・政治史
10. 尹 健 次 植民地期・思想史
11. 姜 徳 相 植民地期・民族運動史
12. 並木 真人 植民地期・民族運動史

インド亜大陸における社会変動と政治構造

主任 柳澤

1. 辛島 昇 南インドにおける社会構造の変動
2. 水島 司 南インドにおける社会変動と地域社会
3. 長崎 暢子 北インドにおける民衆意識と政治行動
4. 粟屋 利江 ケーララにおける社会変動と家族
5. 柳澤 悠 南インド農村における経済変動と消費構造
6. 山本由美子 近代インドにおける宗教と社会変動
7. 竹中 千春 両大戦間期インド民衆運動

VIII 研究活動

8. 中里 成章 ベンガルにおける1940年代の政治変動

9. 佐藤 宏 現代インド亜大陸の宗教と政治

インド古代叙事詩の研究

主任 上村

1. 永ノ尾信悟 ヴェーダ祭式と叙事詩
2. 上村 勝彦 叙事詩の神話
3. 小倉 泰 叙事詩と宗教儀礼
4. 土田龍太郎 初期ヴェーダ文献と叙事詩
5. 山崎 元一 叙事詩と古代インドの社会
6. 羽矢 辰夫 初期仏典と叙事詩
7. 吉岡 司郎 叙事詩の文献学的研究
8. 渡瀬 信之 叙事詩と法典
9. 水野 善文 初期ヒンディー文学と叙事詩

インド儀礼の総合的研究

主任 永ノ尾

1. 後藤 敏文 言語・文献研究から収集される古代インド儀礼
に関する知見
2. 高橋 孝信 古代タミルの儀礼
3. 永ノ尾信悟 ヒンドゥー儀礼の成立と展開
4. 上村 勝彦 サンスクリット文芸作品と儀礼
5. 横地 優子 プラーナ文献における儀礼資料の集成
6. 高橋 淳 シヴァ教アーガマの儀礼
7. 小倉 泰 ヒンドゥー儀礼と寺院建築
8. 藤井 正人 現代インドにおけるヴェーダ祭式伝統の研究
9. 石井 溥 ネットワーク、ミティラー、パルパテ・ヒンドゥー社会
における儀礼の比較研究
10. 山下 博司 南インド社会の儀礼の性格と変容
11. 関根 康正 南インド村落における通過儀礼と宗教儀礼

東南アジアの国家形成と社会経済変容

主任 加納

1. 加納 啓良 インドネシアの国家形成と村落の変容

2. 土屋 健治 インドネシアの国民統合と政治文化
3. 土佐 弘之 島嶼部東南アジアの政治発展とマイノリティー問題
4. 藤原 帰一 フィリピンの政治変動と民主化
5. 桜井由躬雄 大陸部東南アジアの農地開拓史と国家形成
6. 古田 元夫 インドシナの社会主義とエスニシティー
7. 白石 昌也 ベトナムの民族形成と対日関係
8. 末廣 昭 タイの経済発展と企業グループの形成
9. 小泉 順子 タイの国家形成と徴税制度の変容

ジャワ農村史の比較実証研究

主任 加納

1. 加納 啓良 農家センサス調査と歴史的比較
2. 田中 学 農業生産構造と国際比較
3. 水野 広祐 農業外就業と地域間比較

アジア都市比較の課題と方法

主任 鈴木

1. 陣内 秀信 江戸・東京の都市空間の特質
2. 松井 健 那覇の歴史と都市景観
3. 妹尾 達彦 中国中世都市
4. 大木 康 中国都市と大衆文芸・芸能
5. 生田 滋 東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
6. 清水 展 フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム
7. 小倉 泰 中世インドの都市
8. 羽田 正 イランの都市
9. 坂本 勉 近代イラン・トルコ都市の比較
10. 鈴木 董 近代トルコの都市
11. 林 佳世子 中世イスラムの都市
12. 黒木 英充 近代アラブ都市の構造
13. 本村 凌二 古代地中海都市の特質

近代アジア社会研究の方法的課題

主任 濱下

1. 宮嶋 博史 近代アジアの土地変革 — 方法的探求

VIII 研究活動

2. 濱下 武志 近代中国とヨーロッパ
3. 柳澤 悠 南アジア農村研究の方法
4. 鈴木 董 西アジア政治社会史の方法
5. 加納 啓良 東南アジア比較経済史の方法
6. 原 洋之介 東南アジア経済の比較分析

ジャーヒリーヤからイスラームへ

主任 後藤

1. 蔀 勇造 古代南アラビア文明
2. 後藤 明 イスラーム勃興期のアラビア社会
3. 花田 宇秋 大征服時代のアラビア社会
4. 佐々木淑子 初期イスラーム文明

比較イスラム制度史の研究

主任 鈴木

1. 花田 宇秋 ウマイア朝
2. 佐藤 次高 マムルーク朝 (エジプト)
3. 三浦 徹 マムルーク朝 (シリア)
4. 私市 正年 マグレブ
5. 鈴木 董 オスマン朝
6. 林 佳世子 オスマン朝
7. 羽田 正 サファヴィー朝

都市社会と宗教施設

主任 羽田

1. 小倉 泰 インドにおける宗教施設
2. 私市 正年 マグレブにおける宗教施設
3. 小松 久男 中央アジアにおける宗教施設
4. M.サドリアー 中東における宗教と都市社会
5. 羽田 正 イランにおける宗教施設
6. 林 佳世子 トルコにおける宗教施設
7. 三浦 徹 アラブにおける宗教施設
8. 山中由里子 アラブ・ペルシア文学における都市と宗教施設

イスラム史料の総合的研究

主任 鈴木

1. 坂本 勉 イラン・トルコ比較社会史
2. 八尾師 誠 近代イラン史
3. 羽田 正 前近代イラン・トルコ関係史
4. 鈴木 董 オスマン史
5. 林 佳世子 前近代オスマン社会史
6. 黒木 英充 近代シリア史
7. 加藤 博 近代エジプト史
8. 私市 正年 マグレブ史

ダイバー写本コレクションの文献学的研究

主任 鎌田

1. 小田 淑子
2. 鎌田 繁
3. 後藤 明
4. 小林 春夫
5. 佐藤 次高
6. 杉田 英明
7. 竹下 政孝
8. 東長 靖
9. 中村廣治郎
10. 林 佳世子
11. 藤井 守男

特に専門別の分担を定めず、本年は写本の網羅的検討を行う。

東洋学文献センター

資料収集とデータベース

主任 岡本

1. 鎌田 繁
2. 田中 明彦
3. 丘山 新
4. 岡本 サエ
5. 加納 啓良
6. 小倉 泰

文献センター専門委員会の協力を得て、資料情報に関する重点的課題について研究する。

VIII 研究活動

7. 羽田 正
8. 黨 武彦
9. 大木 康
10. 山田 直子

1994年度研究計画

東アジア研究における人類学と歴史学の接点

主任 末成

1. 宮永 國子 日本・宗教人類学
2. 嶋 陸奥彦 韓国・社会人類学
3. 王 崧 興 台湾・社会人類学
4. 瀬川 昌久 香港・文化人類学
5. 桐本 東太 中国・古代史
6. 上田 信 華中・社会史
7. 片山 剛 華南・経済史
8. 末成 道男 ベトナム・社会人類学

アジア諸社会における文化像の生産と消費

主任 関本

1. 関本 照夫 集団と文化の自己主張
2. 松井 健 文化の理論
3. 船曳 健夫 演劇
4. 山下 晋司 観光
5. 中村 雄祐 大衆音楽
6. 内堀 基光 神話の再生産
7. 落合 一泰 写真
8. 富沢 寿勇 文化政策
9. 葛野 浩昭 少数民族の位置
10. 塩田 光喜 口承芸能
11. 清水 展 経典宗教

12. 福嶋 真人 宗教運動

「自然」観の通文化的研究

主任 松井

1. 松田 清 日本洋学史からみた「自然」観
2. 菅 豊 東アジアの民俗動物学からみた「自然」観
3. 須藤 健一 オセアニアの「自然」観
4. 永ノ尾信悟 古代インドの「自然」観
5. 松原 正毅 中央アジア遊牧民の「自然」観
6. 松井 健 西南アジアの「自然」観
7. 篠原 徹 北東アフリカの「自然」観
8. 太田 至 東アフリカ遊牧民の「自然」観
9. 栗田 和明 東アフリカの「自然」観
10. 掛谷 誠 東アフリカ・サヴァンナ農民の「自然」観
11. 武田 淳 アフリカ森林狩猟民の「自然」観
12. 菅原 和孝 アフリカ砂漠狩猟民の「自然」観
13. 宮岡 伯人 極北民族の「自然」観
14. 山本 紀夫 南アメリカ・ヒマラヤにおける「自然」観

構造調整下のアジア経済の展望

主任 原

1. 原 洋之介 構造調整と国際経済
2. 杉本 義行 構造調整と国際貿易
3. 今岡日出紀 構造調整とマクロ経済
4. 藤田 夏樹 構造調整と産業構造
5. 新谷 正彦 構造調整と技術変化
6. 永田 信 構造調整と資源保全
7. 福井 清一 構造調整と農村経済
8. 石田 正昭 構造調整と農業成長
9. 本台 進 構造調整と産業組織
10. 田嶋 俊雄 構造調整と中国経済

東アジア・国際政治と国内政治

主任 猪口

VIII 研究活動

1. 猪口 孝 東アジア国家と社会の比較理論枠組
2. 石井 明 中国の内政と外交
3. 国分 良成 中国の政治過程
4. 天児 慧 中国の社会変動と政治
5. 若林 正丈 台湾の政治
6. 井尻 秀憲 台湾の政治外交
7. 平岩 俊司 北朝鮮の内政と外交
8. 五島 文雄 ベトナムの政治指導
9. 小此木政夫 朝鮮半島の政治外交指導

アジア太平洋における日米関係と国際組織

主任 猪口

1. 猪口 孝 アジア太平洋における日米関係と国際組織の枠組
2. 田中 明彦 国連平和維持活動と日米関係
3. 草野 厚 政府開発援助と日米関係
4. 古城 佳子 国際金融レジームと日米関係
5. 赤根谷達雄 国際貿易レジームと日米関係
6. 近藤 哲夫 アジア太平洋における国際組織

東アジア・東南アジアをめぐる主要国家間の国際政治

主任 田中

1. 田中 明彦 米国の対アジア外交
2. 猪口 孝 日本の対アジア外交
3. 山影 進 アセアンの国際政治
4. 小島 朋之 中国の対外政策
5. 古田 元夫 ベトナムの民族問題と外交
6. 伊豆見 元 朝鮮半島の国際政治
7. 岩田 賢司 ロシアの対アジア外交
8. 谷垣真理子 香港をめぐる国際政治
9. 藤井 新 北朝鮮の内政と外交

比較文化研究の方法

主任 岡本

1. 加藤 祐三 「比較」と「関係」の理論

2. 関本 照夫 文化間比較の可能性
3. 田辺 勝美 世界美術の中の日本文化
4. 宮嶋 博史 東アジア比較経済社会論
5. 佐藤 慎一 近現代中国における政治と文化
6. 岡本 サエ 比較の視点による中国思想研究
7. 吉田 忠 科学思想における比較研究
8. 原 洋之介 東南アジア比較経済史
9. 清水 学 イブンハルドゥーンの再検討
10. 鈴木 董 西欧世界とオスマン帝国の交渉史

殷周社会の総合的研究

主任 松丸

1. 松丸 道雄 殷王朝の精神的基盤
2. 豊田 久 甲骨文から見た殷代地方支配の構造
3. 量 博満 殷代の墓葬から見た社会
4. 李 権 生 黄河流域における殷周文化の発生
5. 高山 節也 殷周革命と周礼
6. 持井 康孝 殷周時代の地方勢力とその文化的基盤
7. 武者 章 新出青銅器より見た殷周古代国家の成立と展開
8. 鈴木 敦 出土史料より見た殷末周初の族関係とその移動
9. 曹 璋 周原地域出土青銅器の性格
10. 飯島 武次 周原地域出土土器の性格
11. 西江 清高 周系土器の変遷より見た西周文化の成立と発展
12. 竹内 康浩 西周青銅器を通して見た西周王朝支配の実態
13. 宮崎 洋一 西周期出土文字史料の弁偽

戦国六朝間出土文献史料とその歴史的背景

主任 平勢

1. 平勢 隆郎 六国文字と戦国社会
2. 福井 重雅 簡牘から見た漢代官吏登用制度
3. 尾形 勇 出土文献史料による国家構造の検討
4. 窪添 慶文 石刻史料から見た北朝社会

VIII 研究活動

5. 影山 輝国 漢代帛書に関する思想史的考察
6. 谷 豊信 考古史料から見た漢代社会
7. 飯尾 秀幸 雲夢秦簡と秦代社会

道家道教思想の総合的研究

主任 蜂屋

1. 蜂屋 邦夫 道教の文献研究と現地研究
2. 高橋 忠彦 道教思想の形成過程
3. 原田 二郎 道教の養生思想と中国医学
4. 前田 繁樹 老子化胡説の形成と展開
5. 池田 知久 六朝隋唐における老荘注釈学
6. 中嶋 隆蔵 六朝隋唐における道教経典
7. 松岡 栄志 六朝文学よりみた道家道教思想
8. 丘山 新 仏典の翻訳と道教思想
9. 末木文美士 道教における仏教思想の影響
10. 菅野 博史 道教思想と仏性思想
11. 松川 育代 唐代の儒学と道家思想
12. 吉田 純 儒学における道教思想の影響
13. 藤本 幸夫 朝鮮文献よりみた道教思想

東アジアにおける仏教経典の受容

主任 丘山

1. 丘山 新 仏典の翻訳論
2. 神家 淑子 漢訳仏典と道教
3. 河野 訓 中国における仏典と翻訳史
4. 小川 隆 漢訳仏典と中国禅
5. 岩松 浅夫 漢訳仏典の語彙・音韻的研究
6. 辛嶋 静志 プラークリット仏典の研究
7. 下田 正弘 インドにおける大乘経典の成立史

華南の地域社会と地方文学

主任 丸尾

1. 末成 道男 広東・台湾客家の習俗
2. 濱下 武志 広東の経済と地域社会

3. 戸倉 英美 広東の民謡（山歌）と民話
4. 西川喜久子 広東の宗族
5. 大里 浩秋 閩粵の秘密結社
6. 岡本 サエ 閩浙の文人結社
7. 丸尾 常喜 江南の習俗と近代文学
8. 笠井 直美 江南の民間伝承
9. 大木 康 江南の説唱
10. 廣瀬 玲子 江南の戯曲
11. 松岡 俊裕 江南の文人
12. 大塚 秀高 江南の小説
13. 高島 俊男 盗賊と社会・文学

中国一九三〇年代の文学

主任 丸尾

1. 芦田 肇 茅盾と鄭振鐸
2. 伊藤 徳也 周作人とその周辺
3. 尾崎 文昭 三〇年代の北京の文学状況
4. 菊田 正信 三〇年代の国語問題
5. 近藤 龍哉 胡風をめぐる諸問題
6. 佐治 俊彦 三〇年代の演劇
7. 坂井 洋史 巴金とアナキズム運動の周辺
8. 鈴木 正夫 郁達夫とその周辺
9. 藤井 省三 三〇年代の上海の文学状況
10. 丸尾 常喜 新文学と伝統社会
11. 刈間 文俊 三〇年代の映画と演劇
12. 代田 智明 魯迅をめぐる諸問題
13. 清水賢一郎 文学と国民国家

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任 濱下

1. 濱下 武志 17世紀以降東アジア経済の発展
—欧米の公私文書分析を含めて—

VIII 研究活動

2. 川村 康 旧中国社会の法構造
3. 青木 敦 宋代公私文書分析
4. 黨 武彦 明清期公私文書の社会経済的分析
5. 岸本 美緒 明清期経済の動態と意識の構造
6. 上田 信 明清契約文書より見た社会関係
7. 寺田 浩明 明清期の契約法習慣の論理
8. 張 士 陽 明清期台湾公私文書分析
9. 臼井佐知子 清末契約文書の社会経済史的分析
10. リンダ・グローヴ 民国時代公私文書より見た農村経済
11. 久保 亨 民国時代公私文書より見た経済構造
12. 宮嶋 博史 朝鮮近代公私文書の社会経済的分析
13. 石川 洋 清末民国初期の公私文書分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任 小川

1. 小川 裕充
2. 林 秀 薇
3. 戸田 禎祐
4. 関口 正之
5. 海老根聡郎
6. 嶋田 英誠
7. 湊 信幸
8. 宮崎 法子
9. 藤田 伸也
10. 救仁郷秀明
11. 井手誠之輔
12. 板倉 聖哲

特に専門別の分担を定めず、本年は日本の公私コレクションに所蔵される中国画の調査を重点的に行う。

朝鮮伝統社会の構造とその変容—方法論的探究—

主任 宮嶋

1. 武田 幸男 李朝・身分制
2. 吉田 光男 李朝・社会史
3. 小川 晴久 李朝・思想史

- | | |
|-----------|------------|
| 4. 山内 弘一 | 李朝・思想史 |
| 5. 吉野 誠 | 開港期・経済史 |
| 6. 趙 景 達 | 開港期・思想史 |
| 7. 康 成 銀 | 開港期・政治史 |
| 8. 宮嶋 博史 | 植民地期・経済史 |
| 9. 宮田 節子 | 植民地期・政治史 |
| 10. 尹 健 次 | 植民地期・思想史 |
| 11. 姜 徳 相 | 植民地期・民族運動史 |
| 12. 並木 真人 | 植民地期・民族運動史 |

植民地期南アジア像の再検討—経済と政治

主任 柳澤

- | | |
|----------|---------------------|
| 1. 水島 司 | 南インドにおける経済変動と地域社会 |
| 2. 長崎 暢子 | 北インドにおける民衆意識と政治行動 |
| 3. 粟屋 利江 | ケーララにおける社会変動と経済 |
| 4. 柳澤 悠 | 南インド農村における経済変動と消費構造 |
| 5. 山本由美子 | 近代インドにおける宗教と社会変動 |
| 6. 竹中 千春 | 両大戦間期インド民衆運動 |
| 7. 中里 成章 | ベンガルにおける1940年代の政治変動 |
| 8. 佐藤 宏 | 現代インド亜大陸の宗教と政治 |
| 9. 脇村 孝平 | 北インドにおける経済変動と人口 |

インド古代叙事詩の研究

主任 上村

- | | |
|----------|---------------|
| 1. 永ノ尾信悟 | ヴェーダ祭式と叙事詩 |
| 2. 上村 勝彦 | 叙事詩の神話 |
| 3. 土田龍太郎 | 初期ヴェーダ文献と叙事詩 |
| 4. 山崎 元一 | 叙事詩と古代インドの社会 |
| 5. 羽矢 辰夫 | 初期仏典と叙事詩 |
| 6. 松原 光法 | 叙事詩と宗教思想 |
| 7. 渡瀬 信之 | 叙事詩と法典 |
| 8. 小倉 泰 | 叙事詩と宗教儀礼 |
| 9. 水野 善文 | 初期ヒンディー文学と叙事詩 |

インド儀礼の総合的研究

主任 永ノ尾

- | | |
|----------|---------------------|
| 1. 後藤 敏文 | 言語・文献研究から収集される古代インド |
|----------|---------------------|

VIII 研究活動

儀礼に関する知見

2. 高橋 孝信 古代タミルの儀礼
3. 永ノ尾信悟 ヒンドゥー儀礼の成立と展開
4. 上村 勝彦 サンスクリット文芸作品と儀礼
5. 横地 優子 プラーナ文献における儀礼資料の集成
6. 高島 淳 シヴァ教アーガマの儀礼
7. 小倉 泰 ヒンドゥー儀礼と寺院建築
8. 藤井 正人 現代インドにおけるヴェーダ祭式伝統の研究
9. 石井 溥 ネワール, ミティラー, パルバテ・ヒンドゥー社会における儀礼の比較研究
10. 山下 博司 南インド社会の儀礼の性格と変容
11. 関根 康正 南インド村落における通過儀礼と宗教儀礼
12. 白田 雅之 ベンガル地方の近代文献における儀礼
13. 八木 祐子 北インド村落における女性の儀礼
14. 田辺 明生 インド社会における権力と儀礼

東南アジアの国家形成と社会経済変容

主任 加納

1. 加納 啓良 インドネシアの国家形成と村落の変容
2. 土屋 健治 インドネシアの国民統合と政治文化
3. 土佐 弘之 島嶼部東南アジアの政治発展とマイノリティー問題
4. 藤原 帰一 フィリピンの政治変動と民主化
5. 桜井由躬雄 大陸部東南アジアの農地開拓史と国家形成
6. 古田 元夫 インドシナの社会主義とエスニシティー
7. 白石 昌也 ベトナムの民族形成と対日関係
8. 末廣 昭 タイの経済発展と企業グループの形成
9. 小泉 順子 タイの国家形成と徴税制度の変容
10. 浅見 靖仁 タイの国家—社会関係と労働政策

アジア都市比較の課題と方法

主任 鈴木

1. 陣内 秀信 江戸・東京の都市空間の特質
2. 松井 健 那覇の歴史と都市景観
3. 妹尾 達彦 中国中世都市
4. 大木 康 中国都市と大衆文芸・芸能

- | | | |
|-----|-------|------------------------|
| 5. | 生田 滋 | 東南アジア前近代における都市の形成と人口移動 |
| 6. | 清水 展 | フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム |
| 7. | 小倉 泰 | 中世インドの都市 |
| 8. | 羽田 正 | イランの都市 |
| 9. | 坂本 勉 | 近代イラン・トルコ都市の比較 |
| 10. | 鈴木 董 | 近世トルコの都市 |
| 11. | 林 佳世子 | 中世イスラムの都市 |
| 12. | 黒木 英充 | 近代アラブ都市の構造 |
| 13. | 本村 凌二 | 古代地中海都市の特質 |

近代アジア社会研究の方法的課題

主任 濱下

- | | | |
|----|-------|-------------------|
| 1. | 宮脇 博史 | 近代アジアの土地変革—方法的探求— |
| 2. | 濱下 武志 | 近代中国とヨーロッパ |
| 3. | 柳澤 悠 | 南アジア農村研究の方法 |
| 4. | 鈴木 董 | 西アジア政治社会史の方法 |
| 5. | 加納 啓良 | 東南アジア比較経済史の方法 |
| 6. | 原 洋之介 | 東南アジア経済の比較分析 |

ジャーヒリーヤからイスラームへ

主任 後藤

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1. | 部 勇造 | 古代南アラビア文明 |
| 2. | 後藤 明 | イスラーム勃興期のアラビア社会 |
| 3. | 花田 宇秋 | 大征服時代のアラビア社会 |
| 4. | 佐々木淑子 | 初期イスラーム文明 |

比較イスラム制度史の研究

主任 鈴木

- | | | |
|----|-------|---------------|
| 1. | 花田 宇秋 | ウマイア朝 |
| 2. | 佐藤 次高 | マムルーク朝 (エジプト) |
| 3. | 三浦 徹 | マムルーク朝 (シリア) |
| 4. | 私市 正年 | マグレブ |
| 5. | 鈴木 董 | オスマン朝 |
| 6. | 林 佳世子 | オスマン朝 |
| 7. | 羽田 正 | サファヴィー朝 |

都市社会と宗教施設

主任 羽田

- | | | |
|----|-------|------------|
| 1. | 藤井 恵介 | 日本における宗教施設 |
|----|-------|------------|

VIII 研究活動

2. 小倉 泰 インドにおける宗教施設
3. 私市 正年 マグレブにおける宗教施設
4. 小松 久男 中央アジアにおける宗教施設
5. M.サドリアー 中東における宗教と都市社会
6. 羽田 正 イランにおける宗教施設
7. 林 佳世子 トルコにおける宗教施設
8. 三浦 徹 アラブにおける宗教施設
9. 山中由里子 アラブ・ペルシア文学における都市と宗教施設

イスラム史料の総合的研究

主任 鈴木

1. 坂本 勉 イラン・トルコ比較社会史
2. 八尾師 誠 近代イラン史
3. 羽田 正 前近代イラン・トルコ関係史
4. 鈴木 董 オスマン史
5. 林 佳世子 前近代オスマン社会史
6. 黒木 英充 近代シリア史
7. 加藤 博 近代エジプト史
8. 私市 正年 マグレブ史

ダイバー写本コレクションの文献学的研究

主任 鎌田

1. 鎌田 繁 アラビア語・思想
2. 後藤 明 アラビア語・歴史
3. 小林 春夫 アラビア語・思想
4. 佐藤 次高 アラビア語・歴史
5. 杉田 英明 アラビア語・文学
6. 竹下 政孝 アラビア語・思想
7. 東長 靖 アラビア語・思想
8. 中田 考 アラビア語・思想
9. 中村廣治郎 アラビア語・思想
10. 林 佳世子 トルコ語・歴史

11. 藤井 守男 ペルシア語・文学

東文研所蔵東京銀行寄贈図書調査・研究

主任 宮嶌

- 1. 濱下 武志 中国関係
- 2. 宮嶌 博史 朝鮮関係
- 3. 加納 啓良 東南アジア関係
- 4. 柳澤 悠 インド関係
- 5. 鈴木 董 西アジア・中央アジア関係
- 6. 武田 晴人 日本関係
- 7. 末廣 昭 東南アジア関係

東洋学文献センター

資料収集とデータベース

主任 岡本

- 1. 鎌田 繁
- 2. 田中 明彦
- 3. 丘山 新
- 4. 岡本 サエ
- 5. 加納 啓良
- 6. 羽田 正
- 7. 黨 武彦
- 8. 大木 康
- 10. 山田 直子
- 11. 大塚 秀高

文献センター専門委員会の協力を得て、資料情報
に関する重点的課題について研究する。

〔班研究報告〕

「東アジア研究における人類学と歴史学の接点」 人類学が文明社会をも対象に含めるようになり、ほとんどの未開社会が文明化している現在、歴史研究の重要性はますます認識されているが、本研究は、具体的にどのような相互交流がありうるのかを検討することを目的とする。この2年間、人類学と歴史、中国研究とモデル論、人類学の認識の盲点、古代史における民族学的発想、ベト

VIII 研究活動

ナムの家譜などについての個別発表をもとに意見を交換し理解を深めてきた。
(末成 道男)

「アジア諸社会における文化像の生産と消費」 国民国家体制ができあがり近代的マスメディアが急速に発達しているアジアの諸社会では、国ごとに、またその内部の諸地域ごとに、文化的自己主張がさかんになっている。国の文化政策、国家内部の文化をめぐる政治、トランス・ナショナルなメディアや大衆文化の影響などから、現代アジアの文化状況をさぐる。(関本 照夫)

「構造調整下のアジア経済の展望」 1980年代以来アジア諸国の多くで実施されている構造調整政策に関して、マクロ経済・国際経済・各産業分野それぞれの側面からその経済的効果について分析し研究してきている。それと同時に、これら構造調整政策を中国等社会主義国での市場経済への移行政策と比較しながらその類似点と相違点とを明らかにしようとしている。(原 洋之介)

「東アジアの国家と社会」 本研究班の目的は東アジアの国家と社会を比較の視点から実証研究を進めることである。中国、台湾、ベトナム、韓国、北朝鮮、そして日本のケースをとりあげ、それぞれ天児慧、若林正文、白石昌也、服部民夫、鐸木昌之、そして猪口孝が1巻ずつ、「東アジアの国家と社会」というシリーズを東京大学出版会から1992年末から1993年春まで全6巻を刊行した。
(猪口 孝)

「東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治」 冷戦後の東アジアおよび東南アジアの国際政治がどのような変容をとげたかを、班メンバーの研究報告を中心に議論した。月に1回程度おこなう研究会では、外部からの専門家(外国人を含む)をまじえて討論することも数回あった。(田中 明彦)

「比較文化研究の方法」 比較研究の方法や文化の概念は、学問分野の違いによってさまざまであるが、それにもかかわらず「比較」は、今日の個別研究を発展させるキーワードとなっている。「比較」の手続きはいかに必要とされ、また何をもたらすかを議論し合い、それを通して比較諸学のネットワーク作りと比較文化の新しいアンソロジーの作成をめざしている。94年度『東洋文化』に「文化摩擦の諸相」として特集を組む予定である。(岡本 サエ)

「資料収集とデータベース」 アジア研究に必要かつ有効な情報処理方法をめぐって、研究・書誌・目録等各自の取り組み方と問題点を発表し活発な意見交換を行ってきた。メンバー以外に学内外から参加者が多く、どの分野にはどのメディアが良いという提案も行われた。その成果は文献センターで進めている「研究所蔵現代中国書データベース」に表れている。今後は、さらにアジア研究の諸分野におけるデータベースの現状を海外も含めて検討し、文献センターのプロジェクトと連動させる方針である。(岡本 サエ)

「殷周社会の総合的研究」 本研究班では各自の掲げた研究課題に基づいた研究とその成果についての研究会が随時もたれており、またその一部は『紀要』に発表されている。共通の事業として研究班を中核として集中的に作業を進めてきたのは『甲骨文字々釋綜覧』の作成であった。数年の努力の結果完成したので、今後の甲骨文研究に多大の貢献をするものと期待される。(松丸 道雄)

「戦国六朝間出土文献史料とその歴史的背景」 本研究班は、当該時期に関する出土文献史料の重要性が日増しに高まっている現状に鑑み、当該史料の活用をはかり伝存史料との接点を探ることを基礎作業とし、各自のテーマについての討議を進め、問題点を整理する。本年は、この研究班発足の年である。主として討議の対象としたのは、平祐の進めている戦国紀年整理に関わる問題である。すでに公表し、あるいは公表しつつある整理作業と六国文字との接点を議論した。(平勢 隆郎)

「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」 この研究班は、明清期を中心とした公私文書を検討し、それを社会史、制度史、文書行政、地方史など多面的に討論する。(濱下 武志)

「朝鮮伝統社会の構造とその変容—方法論的探求」 近・現代の朝鮮社会の個性的展開を、伝統社会の構造とその変容という視点から把握することを目指している。同時に本研究所附属東洋学文献センターの事業として行われている近代朝鮮関係図書の日国内所蔵調査に対しても、1995年度の目録刊行を目指して適宜協力している。(宮嶋 博史)

「六朝隋唐思想の総合的研究」 92年度までは三教交渉史を主要なテーマとし

VIII 研究活動

て六朝隋唐時代の思想史料を検討した。(蜂屋 邦夫)

「道家道教思想の総合的研究」 93年度以降は、道教の現地調査の検討を含めながら、後漢以降の道教史、道教思想史について、各方面の専門家に参加してもらって総合的に検討している。(蜂屋 邦夫)

「東アジアにおける仏教經典の受容」 中国における仏教經典の翻訳と受容、および朝鮮、日本への伝播と受容に関わる諸問題を検討することにより、東アジア諸地域の宗教文化のそれぞれの特質を解明することを目的としている。そのために、インド研究者などの協力をも得て、漢訳仏典の解説を中心に共同研究を進めている。また、毎年2～3回、関連分野の研究者を招いて議論し、より総合的な研究を目指している。(丘山 新)

「華南の地域社会と地方文学」 戯曲・小説・歌謡などの中国の民間通俗文学は地域社会から生まれたものであるが、従来、地域社会に視点を据えた俗文学研究は試みられることが少なかった。この点に鑑み、本研究班では、江蘇、浙江、安徽の江南地区から、広東、福建に至る華南地域全体について、地域社会の構造と方言、口承文学の関係を広く検討してきた。(田仲 一成)

「中国一九三〇年代の文学」 1930年代を中心にしつつ、広く中国現代文学の実証的な研究を目的とし、休暇期間を除く毎週1回雑誌『現代』の輪読をつづけるとともに、夏期合宿(1992年は上海、93年は長野県開田高原)、随時に班内外の研究者による研究報告会を行っている。研究成果の一部は『東洋文化』74号“中国現代文学研究”特集に発表されている。(丸尾 常喜)

「現存する中国絵画の包括的再検討」 この研究班は、東アジア美術研究室所在の中国絵画写真アーカイヴをさらに充実させるため、国内外の公私の中国絵画コレクションの調査撮影を実行する母胎となっており、1990年度にヨーロッパ、91年度にアメリカ・カナダ、92年度に東アジア、92・93年度に国内の抜本的再撮影を行い、多大の成果上げることができた。現在、その成果を承けて、研究班を中心に収集資料の整理を鋭意継続中である。(小川 裕充)

「インド古代叙事詩の研究」 本研究班は、インドの二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』の研究、および、それらの叙事詩が先行するヴェー

ダ諸文献から受けた影響と、それらが後代の思想文化に与えた影響についての研究を目的とする。過去2年間においては、南インドのサンスクリット劇クァーティヤーッタム、ヒンドゥー教法典、実利論、仏典、ヒンディー語文献と叙事詩との関係を、主として研究発表を通じて考究した。インドのサンスクリット文学研究者（S. S. Janaki 等）に講演を依頼した場合もあった。（上村 勝彦）

「インド儀礼の総合的研究」 現代インドで観察される宗教儀礼を考える時少くとも四つの項目を考察する必要がある。つまり、地域差、社会的階層の差、宗教儀礼の種類、そして歴史的変遷の四つである。それら四つの視点を考慮に入れるためには古典文献学と人類学の研究者の共同作業が必要になる。本研究会はそれら研究者の意見交換を通じ、より広い視点からインドの宗教儀礼を理解することを目指す。（永ノ尾 信悟）

「インド亜大陸における社会変動と政治変動」 インド亜大陸で今日大きな問題となっている宗派間の対立やカースト間の対立を、歴史的視点から、その社会的背景に位置づけて考察することを目指した。そのため、政治史、社会学、歴史学、宗教研究など多様な視点から検討してきた。（柳澤 悠）

「植民地体制と農業の商業化」 植民地支配下のアジア諸国では、農業生産が次第に世界市場向けに商業化していったが、その様態は地域によって異なる。また、その評価は近年大きく変動している。19世紀以前の商品流通との関連や国際的関連に留意しつつ、それぞれの地域について検討してきた。（柳澤 悠）

「ジャワ農村史の比較実証研究」 オランダのアムステルダム・アジア研究センターおよびインドネシアのガジャマダ大学との国際共同研究プロジェクト「現地調査と歴史データによるインドネシア農家経済の系譜的分析」の日本側参加者3名によって、同プロジェクトの作業部会として設けられた班研究であり、すでに収集したデータの分析作業と研究報告書のとりまとめ作業を行った。（加納 啓良）

「東南アジアの国家形成と社会経済変容」 東南アジア諸国における植民地支配の形成・解体と国民国家の成立過程を政治、経済、社会の各分野から多面的に、かつ相互比較を通して明らかにするために組織された研究班で、歴史的背

VIII 研究活動

景の考察から、いわゆる「開発独裁」体制下での諸矛盾の様相など現状分析の分野まで含む広い範囲の問題を扱おうとしている。過去2年間に参加者数名の研究発表と討論を行うとともに、外国からの来訪者からもレクチャーを受け、研究交流の場としての役割も果たしてきた。(加納 啓良)

「アジア都市比較の課題と方法」 従来研究の少ないアジアの都市について、アジア諸地域の専門家と都市研究者が共同して、主として歴史と文化の視点から、検討することを目指している。(鈴木 董)

「イスラム史料の総合的研究」 イスラム圏の史料の存在形態、内容上の特質と確度、トルコ語圏・アラビア語圏・ペルシア語圏の史料の同一事象についての記述の比較対照による各々の特質といった諸問題の解明を目的とする。あわせて、この目的のため史料講読会も行う。当面は、オスマン史料を中心とする講読会を実施中である。(鈴木 董)

「比較イスラム制度史の研究」 前近代イスラム世界の諸制度の形成・伝播・影響関係と各地域・王朝における諸制度の特質について、主として政治制度を中心として、比較史的に検討することを目的とする。(鈴木 董)

「都市社会と宗教施設」 本班の目的は、イスラム世界の都市景観を特徴づけるモスク、マドラサ、墓廟などの宗教施設の機能、建築様式、都市社会との関わりを総合的に把握することである。その際、日本やインド、ヨーロッパなどイスラム文明圏以外の類似施設との比較も試みられる。現在、年に数回読書会を行っているが、将来、このテーマでの現地調査も計画されている。(羽田 正)

「ジャーヒリーヤからイスラームへ」 イスラーム世界の歴史認識では、歴史はイスラーム以前とイスラーム以後とに二分される。前者から後者への変化は、7世紀にアラビアで始まった。歴史の個々の場面での変化はしかし、数世紀の幅をもって表面化する。イスラーム以前と以後の時代の変化を、政治、経済、社会、思想、文学など多様な側面から検討するのが本研究の目的で、定例研究会での研究発表を中心に、研究が続けられた。(後藤 明)

「ダイバー写本コレクションの文献学的研究」 本研究所が1986～87年にわたり購入収蔵することのできたダイバー氏旧蔵写本を活用して、イスラーム文化

の諸相を班員のそれぞれの立場から文献学的アプローチを主な方法として調査研究を進めることがこの班のねらいである。各メンバーが個別的に自己の研究を深めていっているのが主要な活動であるが、同時に班員に限定せず、より広い範囲の研究者をも交えた研究会を開催している。(鎌田 繁)

D 定例研究会

1992年度定例研究会

6月25日 (東アジアの部門II)

報 告 部門の研究概況 戸 田 禎 佑

研究発表 伝元人振鵬筆『唐僧取経図帖』について 田 仲 一 成

数年前、元人王振鵬筆と伝えられる『唐僧取経図帖』上冊十六幀、下冊十六幀、計三十二幀が大阪の某個人の家蔵に蔵せられていることが判明した。図冊は清末に日本に伝わったものらしい。これら三十二幀の画は、唐三蔵法師玄奘が西天に赴いて経典を持ち帰る話を画いたものであるが、従来知られていた「取経図」とは異なった次のような特色をもっている。

- (1) 画題の多くが唐宋の古文献からでてきていること：例えば『大唐西域記』、『大慈恩寺三蔵法師伝』、『大唐三蔵取経詩話』など。
- (2) 玄奘が法力を駆使する行者として画かれていること：取経詩話以降の西遊記の話では、玄奘は無力な高僧で、妖魔と闘うのは孫悟空以下3人の従者であるが、この図冊では玄奘自ら錫杖を揮って妖魔と闘っている。
- (3) 孫悟空、猪八戒、沙悟浄が取経の旅に随行しないこと：3者はそれぞれ1回登場するのみで、取経団を形成せず、玄奘は1人で旅を続ける。

以上を総合すると、この図冊は所謂『西遊記』とは異なった構成をもっており、西遊記に遥かに先行する物語に基づいていると思われる。内容不明の画も少くないが、西遊記形成史の上で重要資料であることは疑いない。

討論 戸田 禎佑 司会 戸田 禎佑

VIII 研究活動

9月24日 (南アジア部門)

報 告	部門の研究概況	上 村 勝 彦
研究発表	チョマル郡の85年——中部ジャワ北海岸農村の社会経済変容	加 納 啓 良

1990年から今年までの3年間に、インドネシアのガジヤマダ大学農村・地域開発研究センター (P3PK-UGM) およびオランダのアムステルダム・アジア研究センター (CASA) と行ってきた共同研究 (現地調査と歴史データによるジャワ農家経済の系譜的研究、通称チョマル・プロジェクト) の概要と、その成果の一端が報告された。調査の対象となったのは、中部ジャワ北海岸に位置するプマラン県のチョマル地方の農村である。今世紀の初めに、この地域の24の村落の3000世帯近い農家の土地所有、各種の動産所有、農業生産額などについて、他に例を見ないほど詳細な調査がオランダの研究者によって行われ、資料として記録された。この膨大なデータを出発点として、同じ地域の農家経済にどのような変化が生じたかを、現状調査による比較を通じて探ること、またオランダとインドネシアの双方の公文書館に残された記録の調査と、現地でのオーラル・ヒストリーの手法による聞き取り調査によって、その歴史的背景をも明らかにすることが、この研究の主な目的であった。この日の研究会の報告では、以上の経緯とともに、日本側研究者が分担した農家経済センサス調査の結果により、(1)人口の著しい増加による土地所有規模の縮小と土地なし世帯の増加、(2)「共同占有」制の解体にともなう土地所有規模の相対格差の増大、(3)農外就業の拡大による所得構成の変化などが、データにもとづいて提示された。

討 論 柳 澤 悠 司 会 永ノ尾信悟

10月15日 (西アジア部門)

報 告	部門の研究概況	鎌 田 繁
研究発表	後期オスマン帝国における官僚制化と家産制化	鈴 木 董

西暦13世紀末から18世紀末に至る前近代のオスマン帝国の5世紀に及ぶ歴史は、16世紀末を境に、前期と後期に分かちうる。従来は没落期としてのみとら

えられがちであった後期においても、単なる没落としてのみとらえることはできないような構造的変化が見い出されうる。

権力構造の変化においては、一方では、支配の組織における官僚制化の進展と、それに伴う実務官僚としてのキャーティブ（書記）の台頭というトレンドが見い出される。

他方においては、「カブ（門）」と呼ばれる大官の非公式な家政の組織が、公式の支配組織の機能を補完し、カブが、公式組織の構成員の供給源としても、少なからぬ役割を果たすという傾向が、定着していった。それは、いわば一種の「家産制化」というべき傾向であった。

のちに、18世紀末以降の近代西欧モデルの受容による改革の受け皿をもつくり出した「官僚制化」の傾向と、それとは一見相反するかにみえるカブの役割の増大という「家産制化」の傾向とを、いかにして統一的にとらえるかが、後期オスマン帝国研究の一つの大きな課題である。

討論 羽田 正 司会 後藤 明

11月12日 (汎アジア部門)

報告 部門の研究概況 友杉 孝
研究発表 儀礼とその積義——形式的行動と解釈の生 成 福嶋 真人

伝統社会に於ける儀礼的行為の特異性は、常に人類学的関心をひいてきた。儀礼の内的構造の豊かさゆえ、単純な機能主義的説明は、より突っ込んだ意味論的分析に席を譲ることになったが、一世を風靡した儀礼象徴論に対しては、その解釈の恣意性、さらに儀礼執行の当事者達が、対応する筈の儀礼的意味について何も語れないという事態から、段々と疑義の声が上がることになった。儀礼は慣習としての擬似一法的な強制性を持ち、当事者にとってはドクサ的な自明性を持つために、それを解釈しようとする傾向は抑制される。と同時にもし象徴という言葉がある要素と別の要素の間を結ぶ社会的規約の体系と考えれば、儀礼を構成する諸要素は、そうした明示的な規約性を持たない。儀礼言語ですら、それは意味論的に開かれたものではなく、むしろその実践において、